

ぼくのかんがえた
おんなせんとういんものがたり

by

Maximum Entertainment Technology

■ ご注意！ ■

“やられ”はありません！



アスファルトを活発に叩く多くの足音が、冷たいコンクリートの巨壁に反響する。合間合間に、軽く、だが鋭い金属的な音が響く。そして甲高い気合の声。

「キューッ！」

「イヤァッ」

梅雨の晴れ間、まだ気温はそれほどでもないが湿気はだいぶある。いつもなら鳥のさえずりしか聞こえないこの場所に、あらぬ活気が巻き起こっていた。

それは奇怪な光景だった。黒いレオタードに身を包んだ何人もの女たちが何者かと戦っているのだ。

女たちはみな若く、少女と言ってもよい風である。だが、そのいでたちは若い娘として常識からあまりにかけ離れていた。身体に隙無く張り付いた黒装束は、しなやかな曲線をくっきりと浮き立たせ、そこからすらりと伸びた両足はタイトの網目に彩られ、最後は黒いブーツのつま先で鋭角的に終わっている。長い袖も細い腕を更に引き締め、その先にブーツと同様の黒い長手袋をはめていた。優美な腰には、全く不釣り合いな、それこそ男物でもまずありえないほどいかつい鋏付きのベルトを締め、広い帯幅をなお上回る巨大なバックルには鳥を図案化したような紋章が打ち出されている。黒いベレー帽と首に巻いた真紅のスカーフは女性らしいと言えなくもないが、毒々しく赤と青に塗り分けられた顔は「過激なお化粧」で済まされる不気味さではない。

「イイーッッ！！」

金切り声をあげて突き出された手にはフェンシングに使うような細身の剣が^{しろがね}銀の輝き

が凶器でそう強いいるのだ。だが女も剣を振り上げた状態のままであり、まだ継戦中と
もとれる。いっそ完全に人質として盾にとられれば構わず斬りかかるのだが、この中途半
端な形勢が女たちを躊躇させた。もちろん、そこにつけ込むのが狙いだ。目標の急な移動
で包囲の輪が崩れる。頃合と見るや、男は獲物に押し当てていた白刃をためらいなく引く。

「エヒッ！！」

全身をびくっと震わせると、女は呆然とした顔で力なく2・3歩進む。鬼は猛然と黒い女
の群れに襲い掛かり、瞬く間に数人を斬り捨てる。

『ギャアアアア～ウウウ～…』

最初の女が歩みを止めてがくりと膝を着き、体を微妙にひねりながらくずおれるその時、
加えて4・5人が追うように倒れる。残る敵は数人。

その中に、赤と黒と、鮮烈に塗り分けられた派手なレオタードを着た女が1人混じって
いる。背も他より一段高く、女たちのリーダーと思われる。

「ギッ！！」

女隊長は憎らしげな表情で鬼を睨み、それからヒュッと剣を振り、相手を真直ぐに指す。
合図と同時に突進する3人の女たち。

『キアアアアアァーッッ』

奇声を張り上げ、必死の形相で剣を振りかざし迫る。

「おおおっ！！」

轟く雄叫びでこれに応じ、猛然と男も駆け出す。

直後、4つの黒い影が交錯する。

「ヒャウッ！！」「ギャッ！！」

先頭の2人は、その刃を振り下ろす間もなく次々と撫で斬りにされ、続くもう1人も、
気圧されてたたらを踏んだところを鳩尾へ一突き。

「やあっ！！」

「ッグウウウウ…」

残るはツートンカラーの女1人だ。今度は先刻のお返しとばかり、男がその切っ先を差
し向ける。

「シィィーッッ」

毒蛇のような唸りで歯噛みすると、女は動いた。それは、一陣の赤い風。

「！！」

仮面の奥で男の目が見開かれる。その刺突は鋭く、強く、他の女たちとは隔絶していた。
真正面からの一撃をさばくその一瞬、背中がひやりとする。

「ィアアアアアアァーッッ！！」

立て続けの猛攻が襲い来る。その体格、長い四肢の生み出す大きく強い躍動。しかし隙
は無い。もちろんそれでも男の方が体格も力も勝っている。密着した黒いスーツへ明瞭に
浮き出た筋肉の造形は相当の鍛錬を物語る。

だが、再び切っ先で競りながら男は押されているのだ。

「(くっ！このっ)」

猛烈な速さと頻度で打ち合わされる剣と剣。正に火花散る勢い。1秒、2秒、3秒…。

「(そろそろ…)」

決着にしたいのだが、攻めの激しさは一向に収まる気配がなく、剣の舞は更に続く。ショートヘアを振り乱し、歯を食いしばって剣を振るう女隊長の顔は、強烈なメイクを通してなお凄絶ながらある種美しかった。そして8秒、9秒、10秒！

「(お、おい…！)」

男が焦りを感じ始めたとき、一瞬、相手の胸元に隙を見つける。

「(よしっ！)」

予定とは違うが、胸の谷間、赤い前身の中央を縦に走る黒い帯の部分に剣を突き立ててとどめだ、と思った、いや、そのように体が反応した。が…。

「(あっ！！！！)」

迫る切っ先を、もう1つのそれがぎりぎりで捉える。普通ならもう遅い。だが、刀身、手首、腕が、あたかも一匹の蛇のごとく柔軟にうねり、一直線に向かってくる力をやんわりと、円を描くように逸らしてゆく。同時に女の体も回転しつつ狙いから外れてゆく。単に体をひねっているだけではない。足さばきが位置の変化に大きく効いている。そして必殺の一撃は、胸の中央から虚空へと導かれ、空振りに終わる。一方向に対する渾身の動作は予想外の変化に応ずる自由に欠け、結果、男は自らの運動力によって体勢を崩しながら女の右脇へ迷走する。一方の女隊長は、そのまま体を一気に一回転させ、なす術も無く自分の横を行き過ぎる敵の無防備な背を思い切り袈裟懸けに薙いだ。

バシッと鋭い音が響く。

「あ痛ァーっ！！」

相手の情けない悲鳴で女はハッと我に帰る。無様に倒れ伏す敵の姿を見るその顔が、残忍な勝利者の歓喜から、落第した受験生の絶望にみるみる変わる。

「ご、ごめんなさい！だ、大丈夫ですか！？」

ついさっきまで死闘を繰り広げていた相手に大慌てで駆け寄る。

その瞬間、場の空気が変わる。人のざわめき、笑い声。まるで魔法が解けたようだ。

「は～い、戦闘員がヒーロー倒しちゃダメですよ～」

「大金星だな隊長さん！」

「すみませんっ！すみませんっ！すみませんっ！…」

周囲に向かい何度もぺこぺこ頭を下げる。その様子は先刻までの女戦士と同一人物とは到底思えない豹変ぶりだ。おじきの勢いでベレーが脱げ、ころころ転がって行く。

「あああ…」

倒れていた他の少女たちも次々と起き上がる。

「部長オ～っ」

「もう、なにやってんですかぁ！」

「あ、あれ？私の帽子どこ？」

非難の言葉は金切り声などではなく、みずみずしい若さをたたえた張りのある響き。

「ごめんっ！みんな！」

赤黒二色の少女が黒一色の少女たちに手を合わせて謝る。

「せっかくいい感じだったのにい～」

ぶつくさ文句を言いながら少女たちは体に付いた土ぼこりや草の葉を払う。ひどい子は顔まで汚れている。

女隊長の少女はハツとして倒した相手に再び声をかける。

「葉山さん！怪我したんですか？」

「……………」

男は四つん這いでうなだれたままだ。

「金ちゃん、今のすぐチェックするから。それからバッテリーとディスクの残量確認して」

「戦闘員のみなさんはお互いに払っこしてね～。ブラシや濡れタオルもあるから要るなら言って～」

せっせと作業する撮影スタッフの間を抜け、3人の男女が歩いて来る。1人は恰幅のいいメガネのひげおやじ。もう1人は同じくメガネをかけているが、線の細い印象を受ける青年。そして最後は”普通の”スーツを着た、折り目正しい感じの女性。

やられ役に気遣われる主人公のもとに近付いてくると、ヒゲオヤジが楽しげに声をかけて来た。体格に見合った野太い声だ。

「おい葉山、今日は最終回だったっけか？予定を早めて次から主役交代だな！」

「監督、戦闘員にあっさりやられてヒーロー交代ってどういう超展開ですか…それにデルタダートはデルタダガーと共闘するんですよ」

オヤジを青年がたしなめる。

「本当にすみません。アキちゃん、また悪い癖が出ちゃったみたいで…」

困った表情で首を傾げる女性。

「あ、監督さん、先生…」

近付いてくる3人に気付くと隊長役の少女は立ち上がって頭を下げた。

「もう、アキちゃん、あれだけ言ったじゃない！熱くなりすぎちゃダメって…あなた、役に入りすぎて周りが見えなくなっちゃうんだから。今までに何人のヒーロー殺したと思ってるの？」

「す、すみません」

アキと呼ばれた娘は恐縮しきりだが、ヒゲオヤジはそんな少女に優しく笑いかける。

「カッコいいじゃん！”ヒーロー殺し”か、よし！次は凄腕の女戦闘員を主人公にしよう！」

そう言ってガハハと笑う。

一方、orz状態のヒーローに青年が声をかける。

「ほら、いい加減に起きろよ」

「ま、負けた、女子高生に負けた…」

マスク越しのくぐもった声。その哀れな様子に青年は苦笑する。

「いや、まあ、見事な勝負だったね。NG集のネタとしては最高…っていうか、映像的にはVery Goodだったよ」

「お、おまえなあ…」

抗議の声を上げて黒い体がむくりと起き上がる。女性が心配そうに声をかける。

「葉山さん、大丈夫ですか？」

「あ、谷村先生、いえ、大丈夫です。心配いりませんよ」

決まり悪そうに頭をかくヒーロー。ここでヒゲオヤジの表情が厳しくなる。

「おまえ、しゃんとしろよ！相手が女の子だからってテレテレ手え抜いたんだろ？」

「そ、そんな事ありませんよ監督」

「おまえなんぞ骨の1本や2本折れたってかまやしないが、そんな調子で怪我でもさせたらどうするんだ？アキちゃんたちはまだ高校生なんだからな！」

「わ、わかってます。すみません」

慌ててアキが割って入る。

「監督！悪いのは私です！葉山さんの殺陣はちゃんと打ち合わせ通りでした！」

「いや、監督の言う通りだよ。ああいう時は僕がちゃんとフォローしないとね。せっかくの熱演をふいにしてごめんね」

「そんな、葉山さん…」

「アキちゃん、あんな凶暴に暴れておいて、今更そんなウルウルかわい子ぶったってムダよ」

「う…」

「幸い葉山さんに怪我はなかったけど、こういう場では一番やっちゃいけないことですよ？相手の安全に細心の注意を払うことは基本中の基本！」

「…はい」

「それにあなたのせいでNGなのよ。プロの仕事を手伝うんだから、いつもの部活以上に気を引き締めてやりなさい。部長のあなたがそんな事じゃ示しがつかないでしょ」

「はい…」

「あ一部長しぼられてる」

「ま、ステージでも撮影でも毎度”必ず”1回はやるもんね。しかもデルタダガーと競演だって超燃えてたもん。絶対ああなるって思ったよ」

戦闘員役の少女たちが互いの汚れを落としながら隊長役の部長が叱られる様を見ている。

「…このお尻の泥、ブラシだけじゃ落ちないな…」

「ええ、ほんと？」

「いま雑巾でふいてみるから」

「…やっ！ちょっと！」

「じっとしててよ。…もっと足開いてくれない？」

「えー…？」

少女ががに股に腰を落とし、もう1人がその突き出されたお尻を濡れタオルで拭く。

他の少女たちも各々自分や仲間の体を拭いたり払ったりしている。

「いやっ！くすぐ、くすぐったいってっ！！」

「ちょっと、ヘンなとこさわらないでよ！！」

「おーい、私の帽子い〜」

その様子をスタッフが目を細めて眺めている。

「こりゃなかなか凄い光景だな。ん？おいタマ！メイキングの撮影もほどほどにしとけ！」

タマと呼ばれた若い男は小型のDVカメラで少女たちを執拗に追っている。

「や、すみません、ついつい目を奪われちゃって…」

「やだ〜玉川さんやらしい目してる〜」

「ごめんごめん、あ、部長さんが心配だ！」

「あっ逃げた！」

「追え！逃がすな！」

「先生、アキちゃんも充分反省してるし、もうそれくらいにしてあげてよ」

見かねた監督が先生と呼ばれた女性を押しとどめる。

「本当にすみません。私の監督不行き届きです。注意はしてたんですが…」

「とんでもない！もともと我々が無理を言ってんですから！プロが高校生に泣きついたんですよ。せめて安全はこっちで責任持たなきゃ大人として示しがつきません！」

アキはすっかり意気消沈し、うつむいたままだ。

「部長、また頑張ろ…」

「そうですよ。部長の暴走は一生懸命さの裏返しだって、先生だってわかってますよ」

「うむ、持病の発作のようなものだ」

戦闘員少女たちがアキを慰める。最後に倒された3人、まだ服に汚れがついたままだ。

「アキちゃん、そんなにしょげないでよ。ホラ、僕もこんなにピンピンしてるからさ」

アキを励ますためにヒーロー姿でガッツポーズをとる葉山。

「あーっ！！」

その時青年が叫んだ。

「な、なんだよ真まこと！？」

「お、おまえ、背中、せなか！」

一同、青年の指差す先を見る、そして…。

『ああっつ！！』

「え？え！？ど、どうしたんだよ？…あっつ！まさか！！」

両手で懸命に背中を探る葉山。しかし手袋をしているのでよく判らない。だが周りの目にははっきりと見えた、黒いスーツを斜めに走る大きな裂け目が…。

「少しじっとしててくれ。今見るから」

「あ、ああ…」

真と呼ばれた青年が破れた衣装を調べる。

「うわ、これは…」

「どうだ如月、直りそうか？」

「…厳しいです」

「なにィ～！？」

さすがに慌てる監督。

「佐藤君！予備のスーツ出して！」

手近にいた若いスタッフに声を飛ばす真。

「え？予備って、デルタダガーのですか？」

「そう、2号車の衣装ケースに入ってるから」

「グレーのやつですよ？了解。でもスーツしかありませんよ？プロテクターは？」

「いいから、とにかくそれだけ持って来て」

「へーい」

返事をすると車の方へ駆けて行く。

「裏地も黒だから一見わからなかったのか…。弱ったな～、今日もまだ撮影があるのに…
なんとかなんないか？」

「スーツはこれ、ダメですねもう。ここまで派手に切れちゃたら継ぎ目のごまかしようがない。まあ、それは代えがあるからいいんですが、プロテクターにまで傷がついちゃってるのが…」

この緊迫した場面の中、アキはそろそろと後退り始めていた。ここまで被害が出てしまっ
っては、さすがにただでは済まないだろう、いや、監督や葉山たちに責められるのはいく
らでも構わない、そんな事は当然だ、土下座でも何でも、自分の身で償えるならそうす
る事に何のためらいもない、彼女の恐れはただ1つだった…。

「…アキちゃん、あなたまさか、逃げようなんてしてないでしょうね？」

その瞬間、無言で身をひるがえし、全力離脱をはかるアキ。直後、彼女の体は大きく仰
け反る、まるで下半身を上半身が引き止めるように。

「くう！？」

アキの首に巻かれた赤いスカーフが後へピンと引っ張られ、その端を、女教師谷村の中
指と人差し指が挟んでいた。揃えられた2本の指が赤い布地を万力のように固定している。
喉が絞まり相手が怯むや、彼女は楽々と教え子を手元へ引き寄せせる。レオタードに背後か

らからみつく2本の腕…。アキの顔が恐怖にひきつる。

「いやあああーっ！殺される———っ！！！」

必死に逃げようと大暴れするアキ。2人とも170センチ以上で女性としてはかなりの長身だが、アキの方が少し高く、肩が張っているので、こうして密着していると生徒の方が実際以上に大きく見える。その相手を腕ごと胸周りで固め、いくらあがこうとがっちり放さない。

そっと耳元でささやく。

「沢田ア、おまえ何て馬鹿力でブツ叩いてんだよ。その薄っぺらい戦闘服も、あのサーベルでズタズタにしてやろうか？」

アキの動きがぴたりと止まり、小刻みに首を横に振る。その顔は正に捕われ喰われようとする哀れな獲物のそれだ。

「バカタレっ！！」

「ひゃあっ！！」

谷村はアキの上半身を強引にねじふせるとヘッドロックの体勢に素早く移行。ギリギリと締め上げる。

「ぎゃあああー痛い痛い痛いーっ！！」

アキは即座にパンパンパンと鬼教師の背中を叩き降参の意を表すが攻撃の手はいささかも緩まない。

「ああ？楽に往生できるわけないだろ？」

「ひいい…」

「白華女子学園アクション研究会”鉄の掟”！」

「ううう…失敗は自らの死に様で償う…ですう」

「よおし！じゃあ気合入れて地獄へ落ちろっ！」

「っ！！」

一瞬、谷村の体がアキの下に沈み込んだように見えた。と、ほぼ同時にアキの体は頭を中心に大きな真円を描き、すらりとした長身が地へ仰向けに叩きつけられる。

「ゲウッ！！」

そして大地へ貫くようなとどめの一撃が無防備な腹に叩き込まれる。

「破アーツ！！」

「ギア`アーツ！！！」

凄まじい絶叫、アキはかっと目を見開き、打たれた腹を天へ突き出す。ブリッジ体勢で全身をわななかせ、無念の表情で何かを掴むかのように手を差し伸べ、それから糸が切れたように脱力放身した。半眼の虚ろな表情。そのまま動く気配が無い

「アキちゃん！？ちょ、ちょっと先生やり過ぎですよ！！」

それまであっけにとられて見ていた監督が慌てて駆け寄る。

「アキちゃんしっかりして！」

山本が少女の頬をはたくが反応は無い。

「ちょっ、誰か酸素！、や、AEDかこの場合！？いや、それよりすぐ救急に連絡を！！」

「監督…」

必死なヒゲオヤジの肩を後から眼鏡の青年が叩く。

「何だ真！ぼさっとしてないで何かしろ！！」

しかし如月真は落ち着いてニコニコ笑っている。

「…アキちゃん、そろそろ起きてくれないかな？」

「……………す、すみません、凄く起きづらい状況だったもので…」

なんとも恥かしげにアキがのろのろと上体を起こす。

「へ…？」

きょとんとする山本。

葉山が溜息をつく。

「演技ですよ、当然」

「あ…」

顔から火が出そうになる山本。

「まったくもう、社長ってああいうところ本当にピュアというか…」

如月真が苦笑する。

「あ、いや、その…ひゃ～参ったな…何なんですこれは…？」

少女は地面に平伏して説明する。

「あのこれは我がアクション研究会に伝わるしきたりです、その、何か大失敗した者は壮絶な死に演技で皆に許しを請うという…」

「そ、そうだったの…」

「衣装を傷めた上に驚かせてしまってすみません！け、決してふざけたわけじゃないんです！」

先刻から黙って見ていた谷村が小さく頷く。

「ま、合格」

「え～！？先生あまいい～」

「あまいあまい！」

3人娘が不満を漏らす。

「いいの！山本監督の見事な騙されっぷりに免じて（ハート）」

谷村ににっこり微笑みかけられるとヒゲの山本は首筋をかいて恥じ入る。しかしすぐ心配そうになる谷村。

「でも監督、本当に大丈夫ですか？できることがあれば何でもしますから言ってくださいね」

「や！大丈夫です！如月なら何とかしてくれますよ！な！」

「やってみましょう。ま、どうにかなりそうです」

そういつてにっこりする如月真の笑顔は頼もしかった。

「あ～如月さん！どうかよろしくお願ひしますっ！」

手を合わせて拝むアキ。

「よ、良かったですね。けが人が出なくて…」

「？、タマ？おまえそこで何やってんだ??」

山本が足元を見ると、そこには制作進行の玉川が数人のレオタード少女に組み伏せられていた。

「はは、ボクなんだか幸せです…」

「おまえ…はあ…」

監督はしばし天を仰ぎ、それから苦笑した。

「とりあえず飯にしよう！」

「うう～、みんながうらやましいい…」

沢田亜紀が嘆く。割り箸を噛み、恨めしそうに見やる先にはアクション研究会の女子部員達が葉山を囲んで楽しそうに昼食をとっている。まだ午後の撮影があるので、みな役の姿のままだが、葉山は当然マスクを脱いでいる。

撮影していた駐車場の一角にビニールシートを広げ、葉山を囲んで車座になった様子はまるでピクニックだ。全員黒尽くめという事を除けば…。

一方、亜紀は谷村や山本、その他の撮影スタッフと一緒に広い駐車場の反対側である。こちらは折り畳み椅子が何脚かと、あとは適当に場所をとって弁当を広げている。技師の如月真だけは衣装の修繕で姿が見えない。

「ああ葉山さん、やっぱりかっこいいなあ…」

葉山光一、山本ワークス所属のアクション俳優。精悍な顔立ちとそつのない演技力、ギリシャ彫刻のように均整の取れた逞しい肉体、そして武術にも通ずる卓抜した体技、いくつもの才能を兼ね備えた彼は、初の主演作「暗黒貴公子デルタダガー」において、主役がそのままヒーローのスーツアクターという離れ業をこなす。

「はあ…」

憧れの君を遠く眺めながら、不気味な戦闘員メイクのままうっとり溜息をつく。

「ヒーローにメロメロの戦闘員なんてしまらないわよ沢田さん」

谷村の言葉にびくっと首をすくめる亜紀。むっとして顧問を振り向く。

「あの私、許してもらえたんじゃ…」

「何言ってるの」

「あっっ！！」

何かが手元をよぎったと思うと弁当からエビフライが消えていた。それは谷村の箸の間に挟まり、もう口へと受け渡されるどころだ。

「おうにかフロヘフハーあひゅうへんれきたはらいいけろ、(ゴクリ) そうでなかったら幽霊病院屋上からクッションダイブ100回でもすまないわよ！これくらいは当然。結局スーツ着ダメにしたんだし」

「う…」

エビフライがぼっかり抜けた穴をしょんぼりと見つめる亜紀。

「あはは、やっぱり僕らじゃ寂しいよねえ。いいから行っといでよ」

山本監督が見かねる。

「あ、いえ！そんなことないですよお！」

両手を振って否定するが、その笑顔はちょっと白々しい。

演者とスタッフが別々なのはくつろぎを妨げないためだ。休憩中も演出や演技など撮影の諸般について検討が行われる。演者をそれに巻き込まないというのが監督のやり方だ。当然亜紀は向う側のはずだが、スーツを破損させた罰として1人だけ”島流し”を谷村に命じられたのだった。

葉山は落ち着かなかった。周囲をレオタード姿の女子高生に囲まれて飯を食うなど、もちろん初めての体験である。いや、大抵なら生涯ありえない状況だろう。ましてや、笑いさざめく彼女たちの関心が自分に集中しているのだ。葉山は好物のエビフライの味すらわからなかった。それどころか「恋人はいるんですか〜?」「好きな食べ物は何か〜?」「この中で一番タイプなのは誰ですか〜?」と矢継ぎ早の質問攻めで食べ物を口に運ぶのも一苦労だ。先刻とはうって変わって防戦一方のヒーローだった。

「(いやこれは、撮影そのものより疲れるかも知れないぞ…)」

すがるように監督たちのいる方を見る。もちろん誰が来るあてとてないのだが、意外にもこちらに手を振る者がいる。赤いレオタードを着た女戦闘員の隊長だ。

「は、はは…」

力なく手を振り返す。

「あーっ！ダメですよお！部長は罰ゲームなんですからあ！」

「そうそう！もう、部長も未練がましいなあ…」

「さ、あんな人の事は気にしないでくつろいでください」

「ハア… (いや、君たちが気になってくつろげないんだけどね…)」

「あ、今葉山さんが手を振ってくれた〜！」

そう言って浮いた亜紀の腰を、ベルトの後ろを引っ掴んで落とす。

「ひゃあ!？」

「落ち着いて食べなさい」

「先生ひどい…」

なおも名残惜しく見やると部員たちが葉山を隠すように通せんぼしたり、頭上で”×”を作ったりして「こっちを見るな」というサインを出している。

「あいつら〜！きゃっ！」

亜紀のお尻は再び椅子に引き落とされた。

「いやーしかし若い子は凄いな。おじさんもうたじたじだよ…」

葉山がしみじみ言う。

「いや〜だ！オジサンだなんて、そんな歳じゃないですよオ〜」

「そうそう！部長のアレはもう演技じゃなくて半分以上ガチンコですから気にしないで」

「手加減無しなら部長なんて瞬殺ですよね！」

「え?…」

葉山の箸からタコウインナーがポロリと落ちる。

「おっと！」

そばにいた少女の箸が素早くそれを捉える。そしてそのまま…。

「はい葉山さん、あ〜ん」

「え…！」

上目遣いににじり寄り、ウインナーを口元に差し出す少女。こうして間近に見るとショートヘアに縁取られたその容貌の愛らしさがよくわかる。その夢見るような憧憬の表情は赤と青のフェイスペインティングに彩られ、何か白昼夢を見ているような非現実感を覚える。

「あーっ！マミったら抜け駆け！」

「協定違反は死刑よ！死刑！」

周りの少女たちが背信行為を阻止せんと押し寄せる。

「き、きみたち落ち着いて！」

「葉山さん！私のエビフライもどうぞ」

「私のエビフライも！って食べちゃった…じゃあ私をどうぞ！」

「おまえなんか食べたらお腹こわすだろ！それより私を（ハート）」

遠くからこの様子を見ていた亜紀が再び立ち上がる。

「葉山さんになんてことを〜！」

「落ち着きなさい。あんたが行ったら火に油をそそぐようなもんでしょ。あら見て、救援が到着したみたいよ」

「あ！！」

「光一い、何だかずいぶん楽しそうにしてるじゃない？」

「え？は、早瀬！？」

葉山の言葉に少女達が一斉に振り向く。同時に耳をつんざく絶叫。

「きゃ————っ早瀬さ————ん！！」

そこに立っていたのは若い娘だった。ジーンズにTシャツ、その上からデニムのベストという軽装はショートヘアと相まって活動的な印象を与える。白華の少女たちより幾分年上、二十歳（はたち）そこそこというところか。

「おー、これはまた勇ましい美女軍団ですなあ！ヒーローも大ピンチというところかな？」

少女達の熱視線が葉山から娘へと一気に移る。

「ステラファイター見てました！」

「今度デルタダガーにも出るって本当ですか？」

「”スターライト・エクスプロージョン！”ってやってください！」

娘は突然両腕を風車のように振り回し、体を独楽のように1回転させる。

「スターライトっ！エクスプロージョンっ！！！！」

『キャアアアアアアアアアアアアア————ツツツ（ハート×5）』

耳をつんざく黄色い歓声の中、変身ポーズを解くと恥かしげに頭をかく。

「んもう、いきなり何させるのよ〜」

彼女は早瀬香織、葉山光一同様、山本ワークスの俳優である。「暗黒貴公子デルタダガー」の前番組「天空少女ステラファイター」で主役を務めていた。ステラファイターは顔が露出している意匠だったため、変身後も当然早瀬が演じ、大好評を博した。今や葉山と早瀬は山本ワークスの二枚看板である。

「もしかして今日は噂のデルタダート様も登場？」

「暗黒王女～ッ！！」

少女達がますます興奮する。だが早瀬は両手でそれを押し留める。

「ぞ～んねん、今日は午後からスタントで参加するの。だからみんなと仲間よ、白華女子学園アクション研究会のみなさん、よろしくね！」

「えーっ！？ステラファイターの早瀬香織が悪の戦闘員に！？」

「うそお！」

「私、センチリオンの頃から戦闘員役は何度もやってるのよ」

「だって、ガルーダの女戦闘員は顔出しじゃないですか、ぜんぜん違いますよ！」

「じゃあフェイスペイントするんですか！？」

「ええ、もちろん」

「黒レオタに網タイツなんですか？」

「ええ…」

「キエーッ！！とか奇声を張り上げたりするんですか？」

「す、するかな？」

『おおお～…』

少女たちが顔を見合わせどよめく。

「…助かった」

盛況の片隅で、かしましい集中攻撃から開放された葉山がホッと肩を落とす。

「何が『助かった』だ…」

「うわあ！？」

薄気味悪い声に驚く葉山。

「た、玉川さん！？いつからそこに！？」

そこには恨めしげな顔でビデオカメラを構えた玉川が立っていた。

「ずっといたよ。葉山おまえ、少しは嬉しそうにしろよな。俺なんてさっきから空気扱いなのに…」

「玉川さん！何してるんですか！早く早瀬さんと一緒のどこを撮ってくださいよお」

「ハイハイただいま～♪」

女の子のお呼びがかかるやいなや嬉々として復活する玉川。

「あ、タマちゃん、ひょっとしてメイキング撮ってるの？へ～…」

カメラを回す玉川に早瀬が気付く。

「DVなんか使ってずいぶん熱心じゃない？普段はちっちゃなデジカメで適当に撮ってる

だけなのに」

面白そうにレンズをじーっと見つめる早瀬。

「な、なんだよ香織ちゃん」

「絶対下心あるよねー？」

周囲の少女たちに悪戯っぽく言う。

「そ、そんな～、僕はただ青春の美しい一コマを残してあげたいな～と思って…」

「うそうそ！さっきも殺陣師の鎌倉さんに注意されてたんですよ～」

「やっぱり！」

笑い声が満ちる。

「ひどいやみんな、そりゃ全く無いとは言わないけどさあ…僕の下心はピュアだから許してよ～」

「なにそれ～」

一同爆笑。

「でもみんな、そういうカッコに慣れてる感じね。普通もう少し恥ずかしがらない？」

香織の言葉に少女たちは顔を見合わせる。

「そうですねえ…でも部活中は毎日レオタードだし」

「毎日って、普段の、その…練習？とかする時もレオタードなの？」

「そうですよ。練習用のレオタードがあるんです」

「アクション研究会のユニフォームですね」

「い、色は色は？」

「玉川さ～ん」

突然わりこむ玉川にあきれろ早瀬。少女たちも笑う。

「黒ですよ。腰には赤いサッシュを巻いてます」

「あ、もちろんいつもはノーメイクですよお」

「だいたいウチの学校は体操着もレオタードだから普通に校内をうろついてますよ、レオタードで」

「ええっ！？そんな学校あるんだ…」

驚く早瀬。

「ちなみに色は純白で～す」

「なるほどねえ、普段から自分も周りもレオタードなのか。でも今日は初対面の異性に囲まれてるわけじゃない？女子校の中とは違わくない？」

「え、だってみなさんプロですから。そんなうわついた人なんていないし、誰かさんを除いて」

「だからそりゃ違うって～」

一方…。

「どうしたの亜紀ちゃん？お腹でも痛いの？」

「葉山さんに加えて早瀬さんまで来たのにおあずけなんて…もう死んだとでも思わなきゃやってられません！」

歓声を遠く聞きながら、膝を抱えて横たわる沢田亜紀が嘆いた。

「あ、そう」

谷村の声に意地悪い響きを聞いた亜紀は嫌な予感がした。そして近づいてくる足音…。

「(え、えええ?)」

早瀬香織である。

「おかえりなさいーい！」

「おはようございまーす！」

次々に声をかけるスタッフに早瀬が手を振り返す。

「おはようございまーす。ただいま戻りました〜」

そしてその足は迷わず山本監督のもとへ向かう。

「社長、行ってきました」

「おう！ ごくろうさん！ 見てたぞ。葉山以上にモテモテだな！」

社長と呼ばれた山本がいたずらっぽく笑う。早瀬が照れる。

「なんだか凄く楽しそうだったから立ち寄ってみたら捕まっちゃって…でも凄くいい子たちですね」

そう言ってみる先では、少女達が再び葉山を包囲攻撃している。

「だろう？ またアクションスキルが半端ないんだ」

「き・き・ま・し・た・！ デルタダガー負けちゃったんですって？」

「そうなんだよ、そこの彼女にね！」

早瀬の視線が、すぐそばで横たわる女戦闘員に向けられる。目が合う2人。

「あ、あ… (は、はずかしーっ！！)」

そして相手は亜紀のそばへしゃがみ、顔を覗き込んでくる。

「へえ！ じゃああなたが部長さん？ …ところで、なんでそんなところに寝てるの？」

「あ、あのそれは…」

「死は沈黙」

亜紀が口を開きかけた途端、谷村の冷たい声が…。

「うう〜… (鬼教師〜っ！！)」

「え？ え？」

「すみません早瀬さん。この子、今反省中なんでそっとしておいてください」

微笑む谷村が寝そべる亜紀の頭からベレーを取って顔に被せる。

「…………… (ひどい…)」

「あ、私、白華女子学園で教師をしている谷村です。今日はアクション研究会の顧問として同行してます。よろしく」

そう言ってみる手を差し出す。

「あ、こちらこそよろしく…」

握手を交していた早瀬がはっとして山本を振り返る。

「そうそう！試写会来るそうですよ」

待ってましたとばかりに膝を乗り出す山本。

「永田さん本人が？」

「ええ」

山本が大きく頷く。

「やっぱり気になるんだなあ」

「これ見せたら目の色変わりましたよ」

そういつて早瀬がポケットから取り出したのは1枚のディスクだった。レーベル面には油性マジックで「白華アクション研デモ」と書いてある。

「あ！それ私達の…」

「覗きはダメよ（ハート）」

「もふっ！」

こっそり様子を窺っていた亜紀のずらしたベレーを谷村が直す。

「そ！あなたたちが撮った自主制作映像。うちに送ってくれたアレよ」

「^{トリプルエー}AAAの連中に見せたんですよ。あ！まずかったですかね？」

谷村がかぶりを振る。

「いえいえ、かまいません。ところで…永田って、永田京子さん？」

「そうですけど…え、お知り合い？…ああ！なるほど」

合点がいったという風に山本が頷く。

と、早瀬の表情が引き締まる。

「社長、ちょっと…」

「ん…みんな！撮影開始は1時半からだから、よろしく。…谷村先生、ちょっと失礼しますね」

「何か問題でもあったんですか？」

「いえ、こっちは関係ないことなんで…ま、別な仕事の話です」

「劇場版ジャストレンジャーの方は一月後の撮影開始は難しいですね、コスレンジャーの制作で人もお金も一杯一杯らしいし。メディア振興基金にでも頼ろうか、なんて話も出たりして…」

難しい顔で山本がうなる。

2人は敷地の正門に場所を移していた。こころもち声も押さえ気味に聞こえる。

幅6～7メートルもある広い門。スライド式の長い門扉は、ものものしい重厚さの鉄製で、全体にさびが浮き、つる草がからみついている。今は端が1メートルほど開いているが、これはスタッフ総がかりで動かしたものである。

外には石畳の坂が薄暗く続いており、曲がって木立の中に消えているその先をずっと下って行った先にロケ隊の車が停めてある。現在は坂の入口に移動不可の車止めがあり、この敷地まで乗り入れられないのだ。

門外のひんやりした薄闇を見つめたまま山本が言葉を次ぐ。

「う～ん弱ったねえ、もう少し番組の人氣があればスポンサーも気前良くなるんだろうが…」

「私もデルタダガーのレギュラーになると日程の融通が利かなくなるし、これ以上遅れたらどうします？」

「それは、僕が直接東亜さんと話をしてみるよ、もう1度。この件に関しちゃAAAだってうちと立場は同じなんだから」

それからしばらく早瀬の報告や、それに対する山本の質問などが続いた。

「ま、永田さんが来るならその時にちょっと相談しよう。君も同席して。…この件はこのくらいにして、午後の事なんだけどさ…」

「あ、そうそう、衣装はともかくフェイスペイントは？白華の子たちは自分でやったんですよね？私ちょっと自身ないな～」

「うん、メイクは亜紀ちゃんにやってもらって。あの子上手いから」

「部長さんに？」

早瀬は小首を傾げ、それからにっこり笑って頷いた。

「わかりました」

「うん、着替えも含めて手伝ってもらってよ」

30分後。沢田亜紀は悟りを得て法悦の境地にあるような顔になっていた。傍らには自分と同じ隊長服の早瀬香織。

「う、美しいです…」

「え～？こんなメイクしてるのに～！？」

早瀬の顔も既に赤と青でどぎつく塗られている。普通なら本人かどうか見分けるのも難しいだろう。

昼食も終わり、午後の撮影開始までのひと時である。戦闘員役の少女たちは各々準備運動や演技の確認・練習に余念がない。先刻までとは打って変わった真剣さだ。監督を始めとするスタッフは機材の設置や段取りの確認をしている。

香織は衣装に着替え終わった所だ。赤と黒のツートンにぴったりと包まれたその体は、女性的魅力というだけでなく、見る者に美しい調和を感じさせる。

「カッコイイですよお！」

「うわあ…」

「うむ、美しき悪の戦士という感じだ」

そこへ3人の下っ端戦闘員がやって来た。亜紀隊長につき従っていた例の面々である。

「ありがと。部長さんが手伝ってくれたおかげでメイクも完璧でしょ？」

気取ったポーズでウインクしてみせる早瀬。

『萌える～！！』

「あはは…（う、ちょっと複雑な気分…）」

そこへ亜紀が早瀬との間に割って入る。

「こらおまえら！失礼をするんじゃない！」

「え～部長ズルい～。島流しのくせに早瀬さんの着替えを手伝うなんて、それじゃペナルティになんないじゃん！」

「う、うるさいわね！監督さんから頼まれたんだから仕方ないじゃない！先生の許可ももらってるわよ！」

『ブーブー』

3人揃って親指を逆立てる。早瀬もこの3人は特に強く印象に残っていた。

「元気ねえ！あなたたち1年生？」

『はい！』

はちきれんばかりの声に亜紀が苦笑する。

「もう…ほら整列っ！」

部長の令が飛ぶと少女達は驚くべき素早さで、それこそ「ピシッ！」と並ぶ。

「紹介しますね。右から順番に野川優子…」

ボーイッシュなショートの娘が勢い良くおじぎをする。

「真ん中が相原麻美…」

続いてボブカットの娘。瞳のぱっちりした可愛らしい丸顔の少女だ。

「そして貝田沙希」

最後は同じくボブだがすそにボリュームをもたせた髪型の娘。

と、突如野川優子が拳を地面に突き立てるポーズをとり叫ぶ。

「我らっ！」

一瞬遅れて同様のポーズを貝田沙希がとる。

「アクション研っ！」

そして中央の相原麻美が腕を胸でクロスさせる。

『フラックトライスター黒き三つ星っ！！』

最後の「ターっ！」と同時に左右の2人がバック転、後方に間が開いたところで、振り返った麻美と2人が互いに突き出した拳を次々と交差させ、最後に3人がすれ違って前後が入れ替わり、再び振り返った麻美と左右の2人で決めポーズ。麻美は手を合わせたまま両の腕を天にさし上げ、優子と沙希は左右に向かって弓射か投擲競技を思わせる構えをとっている。

「すごいすごい！」

思わず拍手をする香織。

「はぁ…え～こいつらは一応1年生のトップスリーで、この中の誰かがいずれ次の部長になるものと期待してるんですけど…」

「ううっ、なんだかステラファイターが悪に堕ちたみたい！」

「きゃーっ！それいい！」

「うむ、萌える展開だな」

既に3人は部長を無視して香織にたかっている。亜紀の顔がひきつる。

「おまえらァ～午後の準備はできてんのか！」

その言葉に3本の黒い人差し指が亜紀をビシィ！と指す。

「完璧です！」

「右に同じ！」

「フッフ、あんなへまをやらかした部長に言われたくないですな」

「うぐっ！」

痛いところをつかれ言葉に詰まる。傍で見ていた香織が笑う。

「みんな仲良いのね」

「”友愛”は白華の教育理念ですから」

突如聞こえた声に一同が振り向くと、そこに立っていたのはアクション研究会顧問の谷村美津子教諭だった、女戦闘員姿の…。

『ええ———っ！？』

「あら、どうかした？」

一同の驚きにもそ知らぬ風の顔は既にペイント済みだ。

3人組をはじめとする白華の生徒たちは、多少の差はあれ基本的に体操選手のような細く締った体形をしていた。早瀬香織は彼女達に比べて僅かに肉付きの良い印象。だがその差が女性美に一段上の成熟を与えている。しかしその早瀬ですらも…。

「ど、どうしたんですか！？先生…」

「んふ、私もちょっとお手伝いをね(ハート)。ま、部長の不始末のお詫びということで…」

そう言いながらベルトをぐいっぐいと動かし、大きなバックルの位置を直す。力強くくびれた腰に、それは迫力満点で収まっている。谷村以外の女戦闘員がみな、細い腰にいかにも重そうなとは対照的だ。そして…。

「(このちち！もはや凶器よね…)」

早瀬も思わずたじろぐその膨らみ、いや、その威圧感もはや”張り出し”とでもいうべきか？周囲の視線を釘付けにして悠然と佇むその姿には”女王様”とでも言うべき貴祿があった。だが衣装は一般兵の黒レオタードである。

「部活の時はいつもイモジャーなのに…」

「先生のレオタード姿って初めて見た…」

「どう？ご感想は？」

ずいと胸を反らして亜紀たちに迫る谷村。2人の胸が触れ合うほどに近づく。亜紀も3

人組もしっかりと膨らみはある。むしろ標準以上と言っていい。だが、眼前の巨峰に比べれば砂場の小山にも等しい無力さであった。亜紀の顔がひきつる。

「に、にく…きゃあああっっ!？」

言い終える前にヘッドロックされる。

「な、に、が、に、く、で、す、っ、て、？」

「先生がホルスタインの肉」

「学食牛丼の超特盛り汁だくダブルLL玉つき」

「コーラ瓶体形3リットルサイズ」

3本の指がビシィ!と谷村の反則的グラマーボディを指す。

「あんたたちい〜!!」

『ひゃあああ撤退ィーっ!』

矛先が向く前に逃げ出す3人。

「もう…」

不服そうな表情で小脇の亜紀を開放する。

「いたたた…ひどいです先生。”肉感的”って言おうと思ったのに…」

首をさすりながら落ちたベレーを拾う。

「いや〜」

巨乳戦闘員につかつかと歩み寄ったのは早瀬だった。

「負けましたわこれは…」

そう言ってベレーを取り、顔を寄せてまじまじと暴力的双丘を見つめる。

「これ…あ”これ”なんて言ってごめんなさい、E?F?もっと上ですか？」

「103センチのJです…」

答える谷村は生徒相手の時と違い恥かしげだ。

早瀬が感嘆の口笛を鳴らす。

「うわー、先生って実はそんなムッチムチだったんですね…」

「スーツやジャージの時はぜんぜん気付かなかった…」

他の生徒やスタッフも集まって来た。

「あまり目立たせない服を選んでのよ…って、みなさ〜ん見世物じゃないのよ〜!」

人だかりに慌てる女戦闘員姿の谷村教諭。

「いやあ、こりゃ見ものですよ先生!まさか出ていただけるとは、こりゃ正に”災い転じて福となす”だなあ!」

いつのまにか監督の山本も混じっている。玉川は…もちろん全身全霊でカメラを回している。

「監督う…こりゃちょっとヤバイっすよ…これじゃもう特撮AV…」

液晶モニタの向こう側から巨乳戦闘員に睨みつけられると玉川は黙った。しかし玉川に限らずスタッフの好奇の眼差しには幾分の不安が混ざっていた。その空気を満足げに確認

すると、山本は谷村に声をかけた。

「谷村さん、一つ何か披露してもらえませんか？」

「先生っ十六連撃やって！十六連撃！！」

「私も！見たい見たい十六連撃！」

生徒達が呼応する。

「…仕方ないなあ」

言葉と裏腹にちょっと得意げである。谷村が手振りで指示を出すと部員の少女達がぐさま周囲の人を誘導する。

「はぁ～い下がってくださ～い」

「先生が表演しま～す場所開けてくださ～い」

駐車場中央の広い空間へ道が開かれる。安全の確保を見届けると、谷村の右腕が頭上に高く差し上げられる。体操選手が演技を始める時の合図か。その引き締まった表情は先刻とは別人のようだ。空気が変わる。その変化は静けさとなって周囲に広がってゆく。

瞬間、時は動き始める。数歩の軽微な助走から谷村の体は勢い良く大地に飛び込み、大地に大回転しながら観客の前を横切る。人々はその旋風が頬をなでたような気がした。最後に大きくとんぼを切って力強く着地。その位置は十分な距離をとっている。感嘆の口笛と拍手を、しかし早瀬は「しっ」と制止する。

「本番はこれからよ」

谷村が早瀬に微笑む。

「では！”中華十六連撃” いきま～っす！」

いきなりくだけた調子で手を振る姿に、つられて方々から笑い声が漏れる。谷村の表情は目を大きく開いて生き生きとなり、ぐっと腰を落として中国拳法とおぼしき構えをとる。異形の廃ビルを背に奇怪な姿の女が演武する光景はなんともシュールだ。

「はぁぁ～～～～…」

呼吸を整えるゆっくりとした動き。

腕組みして見ていた葉山の目つきが変わる。その様子に気付いた早瀬が面白そうに笑みを浮かべた。2人ともこの段階で演者の卓抜した技量に気付いたのである。体に力がみなぎってゆくの判るのだ。それは開放の時に向けてどんどん高まる。

「ハッ！」

気合の一突きが炸裂する。

「ハイッ！！ハイッ！！ハイッ！！」

一打ちごとに鋭く歩を進めながら拳撃は続く。

「ハッ！！ハッ！！ヤァッ！！」

時に蹴りや、舞踊のような動きも交えながら谷村の肉体は瞬動する。量感溢れる肢体が、それを十二分に駆動してなお有り余るパワーによって乱舞する。その様は唸る旋風、目まぐるしくも力感がほとばしる。大地打つ震脚を見た時、人々は足下に揺動を感じた気がし

た。

スタッフたちの目が驚愕に見開かれてゆく。

「(あれ、「妖華乱武」のチャオだよな？すげえ…)」

「(あの体形なら普通オウランかヨウキだろ。超迫力だな…)」

「(乳揺れすご…)」

激しい動きに振られ、双丘が弾む。よほどしっかりしたブラを着けているのか、その揺れは強く制動され、想像より随分と小気味良い。

ちなみに「妖華乱武」というのは今人気の対戦格闘ゲームである。チャオは小柄な美少女で、スピードと手数で相手を翻弄するキャラクターだ。胸は小さい。

「ヤッ!!!」

最後の両手突きが決まり、そのまま静止すると辺りは水をうったような静寂。谷村はすっと姿勢を正し、言葉を失っている観衆に向かって一礼する。

わっと上がる歓声。

「すごい!!」

「中国拳法だよ、あれ」

「たぶん格ゲーキャラの再現、だけど元は武術家のモーションキャプチャーだから…」

「なにそれ!?じゃあ本職の武術家と同等の動きって事??」

白華の生徒達も大喝采である。無論、これを見たのは初めてではない、が。

「すごっ!!イモジャーとぜんぜん違うっ!!」

「なんかすっごく新鮮!」

部長と1年三人娘も拍手をしている。

「いやー…凄い。いつもより気合5割増じゃない?」

「ああいう格好だと雰囲気ぜんぜん違いますね」

「体の動きがよくわかるなあ…」

「ぶるんぶるん…」

そう言って自分の胸を両手で揺さぶるのは貝田沙希。すぐさまその頭に亜紀がぱしっと突っ込みを入れる。

「あいたっ!」

「おまえはそこかい!」

「いやでも沙希の気持ちわかる。アレは凄いですよ。ゲームの画面でしか見たことないもんあんなの」

「当たたら吹っ飛びそうだよね…」

「伝説のチチビンタか…あ~確かに、あたしもさっき締められて顔が押しつぶされそうだったよ。アレに挟まれたら本気で窒息しそう…」

満面の笑みを浮かべた山本が拍手をしながら谷村に近づいてくる。

「いやーあ素晴らしい!!現役の頃より磨きがかかってませんか?」

そう言って腕にかけていたタオルを差し出す。苦笑する谷村はそれほど汗をかいてる風ではない。

「なんとかやりおおせました～。でも東亜にいた頃よりやっぱりちょっと重くなっちゃったなあって感じるんですよね。指導者として体の維持には努めてるんですけど…」

「東亜って…谷村先生、東亜剣撃会の？」

葉山光一もやって来た。

「ああ、おまえは知らなかったか。谷村先生はかつて東亜剣撃会におられてね、女性陣のエースとしてそりやもう大活躍したんだ」

「へえ！」

感心する葉山に谷村が慌てて手を振り打ち消す。

「エースなんてとんでもない！一スーツアクターとして飛んだり跳ねたりしてただけですって」

「何を言ってるんですか。AAAが出来たのだって、実質あなたがきっかけだったじゃありませんか」

「本当ですか！？」

「まさか！当時の看板は美作さんとか岸川さんだし、あとは永田さんとか有望な新人連中が中心になって結成したんです。そりやあ私も関わってましたけど、結局やめちゃったしなあ…」

そう言う谷村の目はどこか、ずっと遠くを見ていた。ちょっと声をかけづらい雰囲気だ。

「ま、昔話はこれくらいにしましょうか。みなさ～ん！これで安心しました～？」

谷村の呼びかけにスタッフが歓呼で応える。

「ブラボーッ！」

「いや～おみそれしました。感激です！」

「も、最高です！オレの持ちキャラなんで感激しました！」

「あはは～チャオって判りました？」

次に谷村は教え子を振り向き号令をかける。

「沢田っ！！」

「はいっ！！」

覇気に満ちた応えが返る。

「気合入れていくよ！！」

「はいっ！！」

「もうヘマすんなよ！！」

「う…」

「”う”っじゃない！！」

「は、はいっ！！」

「みんな！ヒーローを本気でぶっ倒すくらいの気持ちで演技しな！ま、その気迫だけは部

長を見習うように！」

『おーっ！！』

意気上がる女戦闘員たち。

「光ーい～、こりゃヘタするとまたやられちゃうかもよ？」

早瀬がいたずらっぽく葉山を肘で小突く。しかし反応が無い。盛り上がる白華の師弟たちをじっと見つめている。

「…どしたの？」

「うわあ!？」

とつぜん赤青メイクの顔に覗きこまれた葉山はバツと飛び退り身構える。一瞬呆気にとられた早瀬だが、すぐさま自分もさっと腰を落とし、ガルータ兵の威嚇ポーズをとる。さすがと言うべきか、ずいぶんさまになっている。

「お、やる気かデルタダガー！ 返り討ちにしてくれるう！」

はっと我に返る葉山。

「あ、いや、ご、ごめん。ちょっとびっくりして…」

「もう、どうしたのよいったい」

奇怪なポーズを解くと早瀬は笑った。

「いや…彼女達、凄いよね…」

「白華の子たち？ そうね、さっき午前の画を見せてもらったけど、ありゃ半端ない高レベルだわ」

「うん、それに先生もさ…」

「そりゃあ、だって元プロだもの。私だって噂には聞いたことあるわよ。東亜の谷村って」

「そうなのか？」

「ああ、光一はね。女でアクションやろうって本気で思う子なら名前くらいは知ってるんじゃないかな」

「…それにしても、ちょっと学校の部活ってレベルを超えてないか？」

早瀬が上目遣いに意地の悪い笑みを浮かべる。

「どうしたの？ プロとしての自信が無くなっちゃった？」

「あ、いや……………まあ、ちょっとな…」

恥かしげに頭をかく葉山。

「わかるわよ。AAAの連中も茫然自失だったしね。でもまあ、特撮アクションなんて部活としては珍しいからそう思えるだけで、高校のたとえば全国レベルとか言ったら、へたなプロより上って有り得る話よね。ましてや指導者は実績あるプロ経験者。谷村先生、学校側も有資格者扱いで、普通じゃ考えられない危険な演技もやってるらしいわ」

「それ、いいのか？」

「もちろん生徒の自主性が大前提よ。あの子達を見れば一目瞭然でしょ？ まあ、いいか悪いかで言えば”条件さえ整えれば自己責任において可”という事になるわね」

「自己責任原則か…」

それは現政府の掲げる大方針の1つである。葉山は複雑な表情でアクション研究会の少女達を見る。確かに、彼女達が谷村を強く慕っている様子は明らかだ。ありがちな恐怖の専制君主ではない。にもかかわらず、彼女達の生き生きした行動の自発性と互いの有機的な自律性は、その指導の並々ならぬ事を雄弁に物語る。

「さ、いくわよ、ヒーローさん！」

「…ああ」

うながされたデルタダガーは女戦闘員と連れ立って後半戦に向かった。

白華女子学園アクション研究会の大奮闘のおかげで「暗黒貴公子デルタダガー第25話」の撮影は2日間の予定を無事終了した。

2日目は敵基地内の場面もあり、東京近郊のスタジオに設けられたセットで行われた。そして一週間後の今日、同じスタジオは黒いレオタードから純白のセーラー服に着替えた少女達で賑わっていた。塗料や接着剤の臭いに華やいだ空気が加わる。

「撮影の時も思ったけど、改めて見るとすごい設備ですよええ、これってぜんぶ山本ワークスの所有なんですか？」

「うん、一応ここがうちの本社ビルなんだ」

「すごーい！」

「賃貸なんだけどね。社長のお父さんが貸ビル業をやってて、かなり格安で使わせてもらってるんだよ」

「え、でもたとえばこの部屋って普通のビルじゃそうそうありえない間取りですよえ？倉庫スペースを改装したんですか？」

「いや、実を言うと新築なんだ、うちのための…」

「ほえ〜！」

女生徒たちに説明しているのは如月真だ。

場所は第1スタジオ。ここ山本MSビル自慢の撮影空間である。建物の名前にあるMSの文字は”メディアステーション”の略だ。この部屋、広い床面積、見上げるような天井と多数の照明、完全な空調と防音、大物搬入用に設けられた大扉など、テレビ局並みの本格的な設備となっている。

今はデルタダガーのセット、主に悪の組織ガルウダの基地が組まれている。黒いレオタードに身を包み、少女達が死闘を繰り広げたのもここだ。おどろおどろしい魔界城の玉座の間や基地の司令室などが百坪のフロア内に詰め込まれており、どれもよく出来ている。

「さ、一通り説明もしたし、撮影の時にもうさんざん見てるから、ここはこれくらいでいいかな？」

「あ、ちょっと待ってくださ〜い。もうちょっとだけ〜」

「え？あぁいいですよ、えーと…副部長さん？」

「はい、副部長の永野晴海です」

セットに顔を寄せ、細部をしげしげと眺めていた娘が顔を上げてにっこりと振り向く。眼鏡をかけた知的で優しげな美少女である。そして体つきが大きい。部長の沢田と背丈は同じほどか。しかも母性的安定感ある体形は、あの部長より堂々とした印象をあたえるほどである。

「そうか、永野さんは初めて見るんだっけね」

「ええ、私、撮影には参加しませんでしたから」

そういう晴海はちょっと寂しそうだ。

「どうして？」

「学園祭の準備とか色々ありますので…副部長って裏方をとりしきる役目なんです」

「あ、そうなんだ…でも、じゃあ演技は全然しないの？」

「ぜんぜん、しないわけじゃないですよ…大根ですけど」

そう言うと舌を出して恥かしげに笑った。

「それにしても、ずいぶん本格的にセット作ってらっしゃるんですね～。びっくりしました！」

「うん、まあ、うちくらいの会社だと珍しいよね。他にCG専用のスタジオもあるんだよ。次に見せてあげるのはそこ」

「ああ、足場だけ自在に組めるようになって映像はあとで合成するんですね！」

「そうそう。こっちに比べると殺風景だけどね」

「是非見たいです！みんな、勉強になるからしっかり見学すること！」

『はい！』

「まで～い！！」

突然スタジオに響く芝居がかった声。同時に方々のセットの陰から4人の人影が飛び出す。ガルーダの女戦闘員である、というより部長と例の3人組である。4人はさっと見学者一行を取り囲み、持っていた武器を突きつけた。今回は剣とおぼしきクネクネ曲がった奇怪な外見の得物である。

「(あ、あれはステラファイターの戦闘員が使ってた剣ね)」

晴海の眼鏡がキラリと光る。その鼻先に迫る切っ先。ポリプロピレンの刀身を妖しく彩るアクリル塗料があちこち剥けているのが見える。威嚇しているのは今回も赤い隊長服を着ている沢田亜紀だ。ノーメイクなのですぐに判る。

『きゃあああっ！』

怯えた様子で1つに固まる生徒たち。

「おまえたち、ガルーダの秘密を見たな？なら生かして返すわけにはいかん！嫌なら我々の仲間になるのだ！それっ！」

沢田があごをしゃくって合図すると3人は永野の両脇を固め拘束する。

「動くなっ！」

「おとなしくしろ！」

「いやあ～はなしてえ～！！」

「ふふふ、まずはおまえから改造してやる！まったく、実に戦闘員向きのくそバカでかい体しおって！」

「きゃあ～たすけてえ～デルタダガ～！」

「お、おまえ……………」

絶句する沢田。

「(…ひどい)」

「(ひどすぎる…)」

周りの生徒や3人組、そして如月真までもが茫然となる。

「あ～も～やめやめ！」

いきなり素に戻った沢田がお手上げという仕草をする。

「いや～久しぶりに見るけど、やっぱりあんたの演技は半端無い破壊力だわ。慣れようっ
たって無理！」

「な、なによ～、せっかくのってあげたのに～」

晴海がむくれると周囲で笑いが巻き起こる。

「部長！おつかれさまです！」

「どうでした？取材」

生徒達が戦闘員を囲む。

「楽しかったよ～」

「ちょっと緊張したあ」

「ふふ、これで我々も業界デビュー」

麻美、優子、沙希の3人娘がはしゃいだ様子で応じる。

「デビューって、主役は私達じゃないわよ。月刊特撮リサーチの山本ワークス特集の企
画！」

言い正す亜紀に真が声をかける。

「亜紀ちゃんお疲れさま。しかし君達、いつでもどこでも即座にアドリブできるんだねえ、
驚いたよ！」

ちょっと照れる亜紀。

「実はこれ、部活の一環なんです。学校生活中は、いついかなる時でも、ああいうアドリ
ブを仕掛けていいし、仕掛けられた方は必ず応えなくちゃいけないという決まりで」

「いついかなる時をもって…たとえば授業中も？」

「い、いえもちろん授業中は～…」

『問答無用ですよねっ！』

「ええっ！？」

3人娘のツッコミに思わず目をむく真。

「実は部長、同じ組の部員数人と授業ジャックを…」

「わーっ！わーっ！その話はっ！！」

大慌てで遮ろうとする亜紀。

「授業ジャックって…まさか授業の最中にいきなり”この教室は我々が占拠した！”とか
やったわけ??」

「その通り！さすが如月さん！」

「ちょっとちょっと…それで、叱られなかったの??」

もはや隠し通せぬと諦めた亜紀が自嘲気味に目を逸らす。

「もちろん大目玉ですよ…谷村先生ともども学園長に呼び出されて、その後で先生にも折

檻されました…」

信じられないという表情の真。

「よく活動停止にならなかったね…」

「実は私たち特撮研って、学園の成績上位者が集中してるんですよね。だから先生方の間では優良部活団体として評価が高いんです、活動も盛んですし。それで多少のオチャメにはお目こぼしが…まあ、あれはいくらなんでもやり過ぎでしたけどね～」

割って入った永野が説明する。

「凄いなあ！君たちそんなに優秀なんだ」

「えへん！ちなみに私は学年2位、晴海は1位、不動のワン・ツーですからね！」

「へえ！たいしたもんだ！白華ってかなりの進学校でしょ？」

「ま、中には例外もいますが…」

そう言って亜紀が目線を流した先には例の3人が。

「部長ひどい！私たちがバカだって言うんですか？」

「そうですよ！せいぜい中の下か下の上くらいです！」

「これは不毛な学校教育に対する我々のレジスタンス…」

「おまえら…」

晴海がくすりと笑う。

「でもまあ、さっきの話も悪い事ばかりじゃないんです。あの”武勇伝”のおかげで亜紀が今の部長に決まったんですから」

「あはは、なるほどね！」

「もう、自慢になりませんよそんなの…」

亜紀が恥かしげに首をかく。

「あ、そう言えば社長は？」

「山本さんはお客様を迎えに、取材の人たちもそちらへ一緒に…」

「えー？ひどいなあ、君達を放って…」

「いえ、セットを見学したいと言ったのは私達だし、みんなを待ち伏せしてやろうという下心もあったわけで…おかげで如月さんに晴海の痴態を…」

「亜紀ったらひどい！それでも親友なの？」

如月がふと気がかりな表情になる。

「お客って、あ、永田さんが着いたのか、ならそろそろ試写会の事も考えないと…、じゃあみんな、次の場所へ行こうか。ああ、部長さんたちは先に着替えた方がいいのかな？」

言われた沢田は自分のレオタード姿をしげしげと眺める。

「そうですね、でもまだ撮りたいって言ってたから…」

「おーおー、まだここにいた！」

その時、スタジオの入り口から野太い声が響く。ヒゲだるま山本である。同行している2人は特撮リサーチの記者とカメラマンだろう。

「ごめんね！待たせちゃって。お、他のみんなも丁度そろってるじゃないか。なら後は一緒に回ろうか？真、これから何処へ行くんだ？」

「社長、永田さんは？」

「ああ、彼女は今、早瀬たちと例の件で打ち合わせしてる。デルタダガーについては試写の後だ」

「そうですか。これから僕たちは第2スタジオへ行って、それから衣装や小道具を見てもらおうと思ってるんですが」

「第2なんてつまらないんじゃないか？ただ足場があるだけだし…」

「そんなことはないです！」

ここで永野が割って入る。

「とても参考になります！是非見学させてください！」

「お、副部長の永野さん？凄い意気込みだね、よしわかった！見せてあげよう！特撮リサ一チさんもそれでいいかな？」

「そうですね、白華のみなさんの画も欲しいし、ご一緒します」

レンズを向けてそう答えるカメラマン。

「じゃあみんな、出発進行一っ！」

その後、一行は第2スタジオへ、それから小道具などを製作する工房へと回った。予定が押しているため少々駆け足になったが、少女たちは熱心に見学していた。

「これが例の剣？」

「ガルータ戦闘員のってこと？そうよ、こないだ使ったやつ」

「亜紀がデルタダガーに一矢報いたっていう…」

「それはもう言わないでよ～」

部長の沢田が情けない表情で懇願する。悪戯っぽく笑う永野晴美。

「ふふ、ごめんなさい。…金属刀身なのね、これじゃ確かに危ないかも…」

部長と副部長が部屋の一画で話していた。そこには武器類の小道具がずらりと並んでいる。小さな物は棚に、槍などの長物は壁やスタンドに立て掛けられている。戦闘員用の武器は数も多いので、正に武器庫という有様だ。そこにはデルタダガーだけでなく、過去の作品で使われた多くの得物が保管されている。

「あの事で今度から刀身をポリ製に変えるんだって」

「ああ、うちもレイピアはポリよね。…切っ先に安全キャップははまってるけど、これ写らないのかな？」

「目立つのは編集で取るみたい」

「そうなんだ…それにしても、何であえて金属製にしたのかしら？」

「それは監督さんのこだわりで…」

真面目に見学している部長らを尻目に、部屋の中央付近は相当にぎやかになっていた。

「” デルタダガー参上っ！ ガルーダの手先ども、我が刃の怒りを身をもって知れ！”」

「うわーカッコ悪う～」

「やっぱニセモノ～」

あの黒いヒーローである。しかし明らかに身長が足りない。衣装もぶかぶかである。まわりを囲む白華の生徒達が口々にはやし立てる。

「もう！ 仕方ないでしょ！ 丈がぜんぜん足んないんだから」

そう言ってマスクを脱ぐと相原麻美である。黒い髪がぱらっと広がり、少し上気した顔にかかる。

「うわ、やっぱり戦闘員が化けてたんだ！」

生徒の1人がタイミング良くベレー帽をかぶせる。

「ま、制服じゃこんな重ね着できないわよねー。でも今日は見学のはずだったのに、いきなり取材のお手伝いでこの格好させられたんだもん、ちょっとくらい役得があったっていいじゃない？」

「ごめんごめん。せっかくかわいい制服着てくれてたのに悪かったね」

山本がすまなさそうに頭をかく。

「そうですよ、社長。部長さんは快諾してくれたけど、相手は高校生なんですから、こういう勝手はあまり感心できません」

如月が憤然と言う。

「いや、そうは言うけどさ、” ガルーダ戦闘員、山本ワークスに潜入！” なんて、なかなか良いアイデアだったろ？」

「それは…まあ、さっき画像を見せてもらいましたけど…」

見学風景を撮影しているカメラマンを目で追う。

「確かに、面白そうでした…。でも沢田さん、本当に良かったの？」

目を向けた先では部長の沢田と副部長の永野が戦闘員用の武器を様々見比べているところだった。振り向いた沢田が心配ないという風に手を振る。

「大丈夫です。ちゃんと先生にも許可をもらいましたから」

「それならいいんだけど…あ、そういえば谷村先生、試写会には間に合うよね？」

永野がにっこり笑う。

「ええ、今日はちょっと急用ができてしまって…でも、もうそろそろ着くと思います」

「電話で話をしたら、先生ったら『あ～私もやりたかった～！』なんて嘆いてましたよ」

「え～！？」

「お～谷村先生、あの飛び入り出演で昔の情熱が甦ったかな？」

沢田が偽デルタダガーに声をかける。

「おーい麻美、いつまで着てるつもりだ？」

麻美は着ている衣装を抱きしめてうっとりしている。

「はぁ…葉山さんの汗のにおい…」

「まったく…そろそろ試写会みたいだから、もう脱ぎな」

「えーっ！？次は私が着ようと思ってたのに…麻美がいつまでも着てるからだよお！」

野川優子が抗議の声をあげる。

「あれ？優子も着たかったの？ごめんごめん、でもならそう言えばよかったのに」

「う～」

恨めしげな様子でも麻美が脱ぐのを手伝う優子。

「おお～う」

その時、1人だけ隅でゴソゴソやっていた貝田沙希が何やら感嘆の声をあげた。

「どうしたのよ？」

「え？何？誰それ??」

「みなの中ごらんあれ～」

戦闘員姿の沙希は、もう1人のガルーダ女戦闘員を抱えていた。脇を抱えられたその体はぐったりと力がない。

「あっ！それは…」

如月真がいかに嫌そうな顔をする。

「フフフ、良い物を見つけてしまった。これはこうすると…」

「あっ！ダメっ！」

『ひゃああああっ！！』

工房に少女達の悲鳴が響いた。

「すみません遅れましてっ！」

扉を開けて勢いよく入ってきた谷村。

『おまえたち、ガルーダ！？』

『フッフ、そうよ、我々はガルーダ女部隊！裏切り者デルタダガー、死ねっ！』

闇の中、輝く大画面に映し出される迫真の映像、そして轟く大音響。

「(おお～凄い！こりゃ200インチくらい？？ちょっとした映画館ね…)」

厚い防音扉を後ろ手にそっと閉める谷村。200インチの大型プロジェクター、その左右には大人の身の丈ほどもあるフロア型スピーカーが置かれている。壁や天井は単純な平面ではなく、音響効果を考慮されたものだ。席は100ほどもあろうか？

「(え、え～、と。…とりあえず、私も座ろうかな？それにしても試写会早めるなんてあんまりよ～。着いたらいきなり”生徒のみなさんが待ちきれなくて、もう始まっています～”なんて言われて…あの連中、あとでひどいわよ！)」

「先生、谷村先生！」

暗がりから押し殺した声が聞こえた。山本である。

「あ、監督」

慌てて谷村も声を落とす。

「すみませんね、先生抜きで始めちゃって…」

「いえこちらこそ、あの子たちが無理言ってすみません…もうけっこう経っちゃってます？」

「いえ、まだ前半の途中ですよ。さ、前の方に席をとってますからどうぞ」

山本に案内されて上映室の通路を画面に向かって進む。

「(え？こんな前の方？)」

「この列が全部開いてますから、好きな席をどうぞ」

「前から2列目を丸ごと開けてくださったんですか！？」

「ははは、最前列は部長さんたちですよ。じゃ、私は自分の席に戻りますね」

「あ、山本さん？」

1人残された谷村はとりあえず頭を低くして列の中央へと移動する。

「(お、本当だ、沢田じゃん…って、戦闘員のままじゃないのよ！…あれ？…)」

谷村は前列の面々を端から見ていく。

「(一番手前から沢田、相原、奥の2人が野川と貝田…戦闘員やるって言ってたのはこの4人よね？1人多い…誰？)」

谷村はその後姿が生徒の誰なのかはっきりしなかった。

「(吉野…でもないし…河村？…じゃないなあ…)」

列を中央へ進み、謎の5人目の背後に近寄る。

「(…こんな子いたかなあ…？)」

谷村は意を決してその娘の肩を軽く叩いた。

「ね、あなた誰だっけ？」

小声で訊ねた瞬間、相手の体が正中線で真っ二つに割れる。バカッという強い勢いである。

「のわ———っっ！?!?!?!」

驚愕の叫びを上げる谷村の前で、二つの半身は力なく前のめりに倒れ、断面を下にして床に転がる。ちょうど魚のひらきのような感じだ。谷村はそれを見つめたままアホっぽい格好で硬直している。画面の反射光に青白く照らされた顔はひきつっている。

そこで突然映像と音声が途絶え、室内の照明に灯が点った。前列の4人が一斉に振り向き、顧問の不思議ポーズを確認すると歓声を上げる。

『やったー！！』

席から飛び上がり、互いに向き合って手を打ち合わせる。

「ここまで見事にひっかかるとは～♪」

「セッティングの勝利ね！」

「先生ヘンなかつこ～！」

周りの席から拍手が巻き起こる。もちろん白華の生徒達である。後の方には山本や如月ら関係者が、あるいは満足げな、あるいは感心した表情で見ていた。そこには先刻の見学では見かけなかった女性の姿も混じっている。

白い制服の少女たちは顔を見合わせて囁く。

「先生どうするのかな？」

「そりゃカンカンに決まってるじゃない」

「部長また折檻かあ～」

「大丈夫よ、今回は副部長がいるし」

拍手がまばらになってきたあたりで貝田沙希が自分の席の下に手を伸ばす。置いてあったポーチの中から取り出したのは小さなデジカメだった。

「では記念に一枚」

フラッシュの閃きと同時に停止していた谷村の時間が再び動き出す。

「これは、いったい、どういうこと～？」

まず床に転がる真っ二つの戦闘員、次にはしゃいでいる1年3人娘、そして…ひきつった笑みでもう逃げ腰の沢田亜紀、と、視線が移動する。

「わ、私はとめたんです！本当です！」

「すみません、先生」

背後の声に振り向くと永野晴海が立っていた。

「副部長？」

「亜紀はやめろって言ったんですけど、私どうしても試したくなっちゃって…」

そう言いながら席の前に回り、倒れている”それ”の片方をひっくり返し、もう片方をその上に重ねると、合わせ目を覗き込み、慎重に位置を合わせる。そして横から抱きしめ

るように力を加える。

「んっ！」

カチッと音がする。最初は胸、次いで腰、そして最後に頭を抱えて…。

カチッ。

「はい、これで元通り！」

背中から上半身を起こして支える。

「永野さん上手いなあ。あれ、慣れてないとけっこう難しいのに…」

試写室の後の方で見ている如月真が手際の良さに感心する。

「やられ役人形、”真っ二つちゃん”で～す！」

そう言って抱きかかえた人形の手を振る晴海。

「はいおじぎ～、『おどろかせてごめんなさい』」

谷村は呆れた顔で深く溜息をつく。

「永野の発案だったの？」

「はい（ハート）」

天使のような永野の微笑み。

「先生、堪忍してください。我々も共犯なんで」

そう言いながらやって来た山本はニヤニヤしている。

「山本さん、ひどいじゃないですか～」

「いや～すみません。私もここまでうまく行くとは…あ、いや、失礼！」

永野が人形の頭を愛しげになでる。その顔は、あまり特徴がなく地味だが、それなりに可愛らしく造ってある。口を少し開き、茫然とした表情は、体を真っ二つにされた瞬間の驚きか？近くで見ると継ぎ目はすぐ判るが、それにしても精巧である。

「この人形を沙希ちゃんが見つけて…良くできてるでしょう？この子。この関節の自然な動き…まるで本物の人体みたい…」

晴海が人形の腕を大きく動かす。曲げ、伸びる肩や肘の滑らかな線は自在に変化し、そこにはいささかも機械的なところがない。

谷村も自分で触ってみる。

「確かに、これはリアルだわ…うわ、動作も滑らか！これ、”自家製”なんですか？？」

「ええ、如月が独自に開発したんですよ」

誇らしげに山本が言う。

「社長、僕1人で作ったわけじゃありませんよ」

当人もやって来る。

「謙遜するな、おまえが設計したんじゃないか」

「すごい、如月さん天才！」

「そんな、天才だなんて…」

困った表情の如月。

「いや～天才ですぞこれは、この柔らかさは～」

いつのまにやら貝田沙希が背後から人形の胸に手を回し、その感触を楽しんでいる。少女の手の中で、そのふくらみは柔軟に形を変える。

「こ、こら！おまえ何を！」

「いや～これは確かに…」

「せ、先生まで…」

沢田が叱ろうとすると谷村までと一緒に揉んでいる。

「これ、材質は何なんです？あと関節の構造も知りたいです」

永野晴海の問いに、如月はちょっと困った顔になる。

「関節は基本的に人体と同じで、それをたくさんのバネや伸縮性のベルトで支持してるんだ。胸の方は、色んな弾力をもつ素材の多層構造で…けど、どっちも詳しい事は企業秘密なんだ。ごめんね」

「残念…でもそれだけの技術ですよ」

「まあでも今時こういうのは流行らないよね。普通はCGでしょ」

「違うんだよCGは！ダミーでやるからこそ”味”ってものがあるの！」

抗議する山本。溜息をつく如月。

「とまあ、そういう社長のこだわりがあって、うちではこういう人形が”伝統”になってるんだけどね。でも正直女性型を作るとは思ってたよ」

「真っ二つや首ちょんぱがあるとは知ってましたけど、この子を見るとやっぱりちょっと抵抗ありますねえ…」

沢田の言葉に如月が山本をじろっとにらむ。気まずそうに頭をかく山本。表情一変にっこり笑うと沢田を振り向く如月。

「それはね、大丈夫。試写を見ればわかるよ」

「そ、そうそう、じゃあ早速始めようか！」

「あ、ちょっと待ってください」

そこで女性の声が割って入る。先刻、山本らと一緒に座っていたスーツ姿の女性だ。その姿に気付いた谷村が人形を放して立ち上がる。

「あれ？…もしかして永田さん？」

女性がかしこまって頭を下げる。ボーイッシュなショートヘアの美女だ。タイトミニからすらりと伸びた足が美しい。身の丈は谷村より上で、沢田亜紀と比べてもなお高い。おそらく180センチほどか。

「お久しぶりです、先輩」

「やっぱり京子ちゃん！いや～あ本当に久しぶりね！見違えたわ！」

女性に歩み寄ると固い握手を交す。

「私そんなに変わりました？」

「変わったわよお！そんな綺麗にめかしてスーツなんか着ちゃって、ずいぶん立派に社会

人しちゃってるじゃない！」

言われて苦笑する永田。

「それは先輩も一緒じゃありませんか。でもそうですね、東亜で一緒にいた頃は、お互いすっぴんにイモジャーでしたもんね」

「そうそう、イモジャーじゃない時は役の格好で、大抵ザコ戦闘員！」

「毎日毎日何度も何度もぶっ飛ばされてましたねえ」

2人は声を上げて笑う。その様子を興味津々で眺めている沢田と永野。

「あの人、先生のお知り合いだったのね」

「うん、たぶん東亜時代の」

「背え高いわね～。あれなら男役もはまりそう！」

「…AAAの永田京子って言ったら、ステラファイターのクラビウス王子じゃないのよ…」

「そうだったわ！…ごめん、なんか今日は葉山光一さんとか早瀬香織さんとか、凄い人達と次々に会って、ちょっと現実感遠のいてフワフワしちゃってるみたい…」

「いつもフワフワしてる晴海がそれじゃ泡立ったメレンゲみたいなものね」

「たはは～」

他の生徒達もひそひそと囁き合っている。

「やっぱりあの人クラビウス王子の人だよ！」

「うん、先生そんな人と知り合いなんだあ…」

と、天井の埋め込みスピーカーから声が聞こえる。

『社長、そろそろいいですか？』

山本は部屋の後方を振り返って手を振り頷く。どうやら相手は映写室のスタッフである。

「先生、永田さん、つもる話もあるでしょうが、一旦後にしてとりあえず見ましょうよ。

暗黒貴公子デルタダガー第25話”スウィート・デビルズ”！」

「あ！そうでした！いやもう楽しみだったんですから！」

「…私もです。あのデモ映像にはかなりやられましたからね。白華のお嬢さん方がプロの仕事にどこまで応えられるのか？お手並み拝見といきましょうか」

「お！なにその冷ややかな目は？言っとくけどハンパな鍛え方してないわよお」

「…そのようですね」

「ははは、ま、とくにご覧あれ！みんなー！じゃあ今度は本当に試写を始めるから静かにしてねー！如月、人形を片付けといてくれ」

『ヒギィーッッ！！』

ガルータ戦闘員の1人がデルタダガーの刃に倒れる。仰向けに大の字になり四肢を小刻みに痙攣させる。

「お、ゆきっち、いい死にっぷり」

「わ、大画面だとすっご恥かし！」

「あ、あ、溶ける溶ける！」

ジュルルル…という不気味な効果音と共に戦闘員の体は濡れ崩れ、形を失ってゆく。

「あーあ、私死んじゃった」

ゆきっちと呼ばれた少女は満足げにそう言った。純白の制服に身を包んだ、この可憐な少女が、いま画面で汚らしく消滅した女戦闘員を演じていたのだ。

「今のってCGエフェクトじゃないよね？」

「うん、昔の特撮で砂糖と硫酸でやってたのと似たような方法らしいよ」

「ええ？人形つくって溶かすわけ？こんな短期間でよくできるなあ…」

「大体の仕組みは同じでも道具はずっと進歩してるんだよたぶん。古い特撮のを見たことあるけど造形のできとか全然ちがうもん」

「つなぎにはCGも使ってるね。うまいなあ…」

沢田や永野をはじめ、白華の少女たちは夢中になって見ている。

場面は丁度、沢田亜紀がデルタダガーを返り討ちにしたりにさしかかっていた。大勢の戦闘員がヒーローの周りを跳梁する。もちろんこれは撮り直したものである。

山本が眉間に皺を寄せる。

「もう何度も見てるんだがなあ…熱演のお陰で弱いものいじめにはどうにか見えないんだが、身長差がちょっと大きいんだよなあ…。やっぱりデルタダガーを早瀬にやらせるべきだったか…」

左手に座っている如月が首を横に振る。

「スーツが無いでしょうよ。…彼女達、身長165センチ以上の選抜チームなんですけどね、なにせ葉山が185だから…」

「うーん、高校生の女の子でその丈をあれだけ大勢揃えられるのは凄いんだけどね…」

「あら、うちなら170センチ以上で同じくらい用意できるわよ」

今度は右隣から永田京子が口をはさむ。

「そんな事より山ちゃん、これ本当に放送できるの？」

永田が小さく指差したスクリーンでは、また1人、戦闘員が大股開きでビクビクと溶解死するところだった。

山本はニヤリと笑い、Vサインをする。

「これは既に局の倫理審査からOKもらったバージョンなんだな」

「ほんとに！？」

信じ難いという表情の永田。

「撮ったほぼ半分はNGにされました。真っ二つとか首ちょんぱは全部…」

如月が指でバツ印を作る。

「あんな人形まで作って？」

「全部ムダですよ」

「無駄じゃあない。今回はそうする必要があったんだ」

そうすると山本は腕組みして背もたれに体をあずける。

『ぎゃあああっ！！』

画面ではまた1人の戦闘員が斬られ、胸元にバツと鮮血が散る。

「これもセーフ、か…」

「全部、男だったら問題無かった表現だ。それが女でも可能か試したのさ」

「なんでまたそんな事を…あ、例の通達ね…」

「そ、”積極的に女性を悪役に配して欲しい”という政府メディア戦略室のアレ」

「”女性犯罪の凶悪化、特に暴力犯罪の急速な増加という現状に鑑み、女兒にも勧善に並べて特に懲悪方向の教育的配慮をする事が望ましい”というのがその理由です。なんなんだか…」

如月真が肩をすくめる。

「ま、そういう事もあって早目に撮影したかったのに、誰かさんが首を縦に振ってくれないから白華のみなさんに急遽代役を頼んだわけ。いやぁ期待以上の結果ですよこれは」

それを聞いて苦い表情の永田。

「…彼女達を知ったのはどういうきっかけで？やっぱり谷村先輩からアプローチがあったの？」

「一月前、いきなりあの映像が送られてきたんだよ。彼女らみんなデルタダガーの大ファンで”こんなの作っちゃいました～見てください”って」

「あれか…」

「デルタダガー第13話”亜空間要塞の血戦”のラス殺陣”戦闘員100人斬り”の完全再現です。セットとかは抜きですが、アクションはパーフェクトです。あの鎌倉さんが唸るくらいですからね」

如月の言葉で永田の記憶が鮮やかに甦る。黒いレオタードに身を包んだ少女の大群が画面狭しと暴れまわる映像は「東亜剣撃会の歴史に残る名場面」とマニアの間で評価の高い大戦闘を見事に演じ切っていた。

『ヒャウッ！』

『ギャッ！』

『ツグウウウ…』

試写の方はちょうど1年生トリオがやられたところだ。CGで加えられた鮮血が飛び散る。

『エウッ！？』

ビクンと体を震わせ、驚愕の表情で刺された胸元を見下ろす女隊長。突いた同様の素早さでサッと剣が引き抜かれると、再び体がビクリと反応する。

『ア、ア、アァーっ！！』

突かれた場所を両手で押さえ、よろめきながら数歩後退すると、両膝を開いて着き、そのまま前のめりにあごを突き出して倒れ込む。天に突き出された尻を1・2度震わせると動かなくなる。上目遣いの虚ろな死に顔。そして隊長の体も濡れたように表面から溶解し始め、その形を失ってゆく。周囲で倒れている戦闘員の体も後を追うように次々と溶けてゆく。先刻部長らが指摘した通り、微妙に作り物臭い古風な手法だが、現代的な洗練を加えられたそれは、むしろCGにはない新鮮さを感じさせた。

これで戦闘員は全滅である。

『これで終わりか？いや…』

邪悪な気配を察知してか、黒づくめのヒーローは緊張を解かず周囲に目を配る。と、高らかな女の嘲笑が響き渡った。ヒーローが身構える。

『誰だ！姿を現せ！』

『王子、私の声をお忘れか？』

『何？…っ！！まさか！！』

ここで流れ出す音楽。交響的メタル調の緊迫感溢れる曲だ。

「(あ、新曲！?)」

「(ワルかっこいい!)」

「(ここで終わりかな~?)」

場面が盛り上がった所で、しかし予想通り画面には”つづく”の文字が…。

映像が終了し画面が暗くなると巻き起こる拍手。鳴り止まぬまま部屋の照明が点る。

「うわーなんか感動した！」

「自分がデルタダガーに出てるなんて、凄く不思議な感じ！」

「これがテレビで全国放映されるんだねえ…」

「やば、なんだか恥かしくなってきた！」

とたんに白華の少女達が賑やかしくなる。

「あの最後の声が新しい女幹部？永田さんよねあれ？」

「そうね、たぶん。これからあっちは大人の難しい話かしらね」

亜紀の言葉にそう答えた晴海の見やる先には山本らの姿があった。

「また幽霊病院なのね」

「うん」

「あなたも好きよね、あそこ」

「うん、それがまたもや取り壊しの噂があつてさ…」

「大丈夫よ、あそこは。そんな話、今まで何度あったと思ってるの」

撮影に使ったあの奇怪な廃墟は戦時中に着工された軍の医療施設で、完成を見ずに終戦を迎え、そのまま世紀をまたがって放置されているのだった。廃墟愛好家の間では有名な建物で、もう1つ、特撮のロケ地としても昭和の昔からしばしば利用され、そっちのファンにもよく知られていた。もっとも、背景としてあまりに使いふるされてしまったため若い作家には敬遠され、最近このんで使うのは山本くらいなのだが。

「前は権利関係が込み入って手が付けられなかったって聞いてるけど、今、あそこ、土地も建物もゼネラルユニオンの物だろ？マンションに建て替えたりしないかな？」

そう問う山本は本当に心配そうだ。永田が意味ありげに微笑む。どこか謎めいた、大人の女の美しさ。

「あそこを買って取ったのは統一国民労組の文化支援活動って聞いてるわ。あなたみたいなアナクロや昭和おやじ世代のために保護してくれるんじゃないの？さ、そんな事より、もっと肝心な話があるでしょ？」

そう言って隣席の山本を見る永田の視線は氷のような冷たさ。しかし監督はそらとぼけて目を逸らす。

「永田さん、その話は後で。今ここではちょっと…」

山本の向こう側から如月が制止する。目線の動きが周囲の女生徒たちを示唆する。仕方ないという風に永田が小さく溜息をつく。

「わかったわ。私も先輩と少し話したい事があるし、それに営業もね！」

「営業？」

首をかしげる如月をよそに席を立つと、永田京子は2人の前を抜けて谷村の席に向かう。そこには既に沢田亜紀と永野晴海が来ていた。今見た演技の内容を検討しているようだ。

「だからもっと建物を有効に使って…あ！」

近づく永田に気付くと2人は恐縮して場所を開ける。

「あ、いいのよ、そんな退かないで」

かしこまる少女達に苦笑する。

「お！京子ちゃん、ずいぶんもったいつけるじゃない？声だけなんて」

立ち上がって迎える谷村。

「あはは、ま、こっちも好きでそうしたわけじゃないんですけどね…」

「紹介するわ。この2人がうちの部長と副部長。沢田亜紀と永野晴美よ」

「初めまして」

深々と頭を下げる晴海、亜紀もすぐそれに倣う。

「見せてもらったわ。名優ね、部長さん！」

「ありがとうございます！」

差し出された手を力強く握ると亜紀の顔が輝いた。

「NG版はもっと凄かったんだって？山本さんに頼んで見せてもらおうかしら？」

「う、そ、それは…」

永野晴美が背を向けて吹く。

「晴海い～！！」

「ごめんなさい。でも私も見てみたいな」

「よし決まりね！じゃ、お姉さん頼んでみるわ！」

「え～！？」

嫌がる亜紀を尻目に、胸の前で手を組み、晴海はうっとりしている。

「ああ、これで、出演したみんなが”あれを見たら部長の（ピー）を握ったも同じですよ！”なんて言ってた素敵映像をこの目で…」

「女のあたしに（ピー）があるかっ！！」

「あんたたち、女の子が（ピー）（ピー）言うんじゃない！我が校のイメージが落ちるでしょ！」

「あ～、さすが女子高だわ、このノリ」

永田が笑う様子を見てきまり悪そうな谷村。

「改めて自己紹介するわね。私は永田京子。もう知ってるみたいだけど、谷村先生とは東亜剣撃会の先輩後輩なの。で、今はこういう事をしてるわけ」

そう言って2人に差し出された名刺には”Amazons Action Agency 代表 永田京子”と言う文字と、その下に連絡先が記されている。

「あ、ありがとうございます！」

「まさかAAAの永田京子その人から名刺を頂けるなんて…感激です」

にっこり微笑む永田。

「ね、卒業したらうちに来ない？部長さんはもちろん、あのデモや今日のに出てた子なら間違いなく採用よ。ま、名門進学校だから大学行くんでしょけど、考えてみてくれないかな？」

「ちょっと京子ちゃん、高校生相手に青田買い？」

谷村が笑う。

「そうそう、先輩にもさし上げなくちゃ」

同じ物を谷村も受け取る。両の手でそれを大事に持ち、しみじみと眺める。

「あの京子ちゃんがねえ…感慨深いわあ…」

「…本来なら先輩が務めるはずだった役目です」

谷村が永田をじっと見る。相手はその目を真っ直ぐに見返す。

「少し出ませんか？外の空気を吸いに」

「…そうね」

そう答えながら名刺をカード入れに収める。

「2人とも、先生ちょっとこのお姉さんと話があるから」

「はい…？」

少し妙な空気を感じた亜紀と晴美が訝しげに見送る。

「おお!？」

永田が上映室の扉を押し開けると、外でぶつかりそうになった誰かが驚きの声を上げる。それは葉山光一だった。早瀬香織も一緒だ。

「あ、ごめんなさい！」

慌てて謝る。

「永田さん？それに谷村先生も。もう試写は終わったんですか？」

「ええ、ちょうど今」

答える谷村と永田を見比べ、早瀬が口を開く。

「それでお2人はどちらへ？まさかもうお帰りじゃないでしょう？」

「ちょっと外の空気を吸いに来ただけよ。まだ仕事は済んじやないわ。そっちについてはあとでね、香織ちゃん。さ、中へ入るんでしょ？どうぞ」

『すみませんっ！すみませんっ！すみませんっっ！…』

何度も何度も凄い勢いで頭をさげる沢田亜紀の姿が大画面に映し出されている。場内は爆笑で割れんばかりだ。

「亜紀ったら、あれじゃ帽子が脱げちゃうわよ」

口に手をあて笑いをこらえる親友を横目に、苦りきった顔の沢田亜紀。そして晴海の言ったとおり帽子は転げ落ち、それを戦闘員姿の亜紀が慌てて追いかける。

「ほ～ら！」

小さく拍手して晴海がはしゃぐ。馬鹿にしているわけでないことは、その瞳の輝きでわかる。隣でむくれる亜紀も怒っているというより恥ずかしげだ。

「もう、こんなとこまで撮られてるとは思わなかったわよ…」

ベレーで顔を隠し、亜紀が漏らす。晴海が悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「フフ、武勇伝がまた1つ、ね」

「そうそう、いい思い出じゃない！」

「早瀬さん！」

後の席から身を乗り出してきたのは早瀬香織である。今日も白のブラウスにオリーブの短いズボンという、さっぱりとした格好をしている。ふっとよぎる、ほのかな柑橘系の香り。

「う～、でも私はOKの方と一緒に見て欲しかったな…」

「ごめんね、私たちちょっと用事があって…でも完成版も一足先にちゃんと見てるから安心して」

映されていたのはもちろん例のNGシーンである。と、唐突に途切れる映像。いかにも未編集とわかる。

『はい、これでおしまいで～す』

映写室からのアナウンスもどこか楽しげだ。

盛大な拍手が巻き起こる。

「部長かっこいい！」

「戦闘員最強！」

生徒達の喝采。

「葉山君、ダメじゃない。あれを見事に受け切ってこそその主役でしょ？そしたら屈指の名場面になったのに」

「仰るとおりです、面目ない…」

永田の小言に力なく頷く葉山光一。

「ま、私に出来るかって言われたら、ちょっと困るけどね…ん？」

亜紀と晴海がじっと永田を見ている。

「あの…」

「何かしら？部長さん」

「さっき、先生とお2人で何をお話しに？」

亜紀の言葉を晴海が引き継ぐ。

「ああ…」

永田の視線が少し離れた席へと流れる。そこでは谷村が山本と談笑している。

「…ちょっと、思い出話をね…」

数刻前。

「良い生徒さんたちですね…」

長椅子に並んで座った永田と谷村。そこは上映室の外に面した”ロビー”と言うにはいささか狭い休憩所である。先刻出てきた扉が向こう側に見える。劇場にあるような立派な外観。内側のざわめきは全て遮られ、他に人気のない周囲は静まり返っていた。2人とも前をじっと見ている。だがその目に映っているのは扉よりもずっと向うの、遠い遠い光景だった。

谷村は永田の言葉に優しく微笑む。

「ありがとう…」

「さっきの本気ですよ、生徒さんをうちに欲しいって話」

「ああ…」

女教師はふと視線を落とす。

「水臭いじゃありませんか。あれきり何の音沙汰も無いと思ったら、こんな面白いお仕事をなさってるなんて」

「部活はあくまでオマケよ。私の本分は国語教師」

「あれがおまけですか…」

谷村は相手の強い視線を感じた。

「…やっぱり進学が基本よ、うちは。もちろん大学でも続ける子はいるけど、それは少数派ね」

再び正面に向き直る永田。

「覚えてますか？先輩。東亜をやめた時のことを」

「……………」

「もう随分たちますね、あれから」

「…そうね」

「大喧嘩でしたねえ。AAA設立目前になっていきなりやめるって言い出して」

ここで一旦言葉を切り、しばし目を閉じる。それが再び開いた時、永田の声音は棘のあるものになった。

「その先輩が、高校生を相手に後進育成ですか？」

「そんな大げさなものじゃないわ。さっき言ったでしょ」

壁を見つめたまま谷村が答える。その顔は穏やかなままだ。

「…教師になったとは聞いてました。私は、先輩が別の道を選んだのなら仕方がないって、他人の人生に口を出す事じゃないって、自分を納得させました。それで谷村先輩の事は忘れる事にしたんです。それが！」

きっと谷村を睨みつける。永田京子にとって彼女は単なる職場の先輩ではなく、憧れであり、目標だった。

「いきなり現れて私の邪魔をするんですか！？」

谷村は苦笑する。

「邪魔だなんてそんな…私はただ、あの子たちに良い経験をさせたかっただけよ。大体の事情は聞いてるわ。そんなに顔出しが嫌なの？あなただったら平気でしょう？」

「…こっちにも色々都合があるんです。撮影できなけりゃいずれ折れると思ってたのに…」

谷村の口から溜息が漏れる。

「京子ちゃんの口からそんな言葉が出るなんて、残念ね」

永田の身が一瞬凍りつく。その表情に苦悩の色が浮かぶ。

「何故です？その道を捨てたからやめたんじゃないんですか？なのにあの子達の演技水準！どうしてその指導力をAAAで発揮してくださらなかったんです？私達じゃ駄目だったって事ですか！？挙句にプロの現場に土足で踏み込んで！かつて同じプロだったあなたが！」

一気にまくしたてると、固く唇を噛んで俯き、押し黙る。

「！？」

谷村の腕が永田の方を優しく抱き寄せる。

「ごめん…」

「……………」

「あれからずっと頑張ってきたんだものね。いろいろ見てるわよ、AAAの仕事。なんだっけ、ほら、あの、^{ミチ}道ピクチャーズとかいうインディーズ系の仕事とか、ずいぶん数こなしたわよね。…ああいうの、ヒヒじじ…失礼、円条社長が凄く嫌がったでしょ？」

京子が小さく頷く。

「自分で作った会社なのに東亜の作品にはコスレンジャーが初登場なんて、あの社長もようやるわ本当に…」

「仕方ありません…それはうちのレベルがそこに達してなかったって事ですから…」

「山本ワークスなら”そのレベル”でも問題ない？」

「それは！」

かぶりを振って強く否定する。

「ずいぶん助けられたわよね、山本監督には。あなただって忍者将軍黒刃とかクラビウス王子とか、当たり役をいくつももらって今の人気があるんじゃない」

「…はい」

「そのあなたが、些細な事に駄々をこねてちゃダメでしょ？しっかりしなさい！」

力のこもった言葉。手が2回、京子の肩を軽く叩く。それは東亜時代、挫けそうな彼女を励ます為によくしてくれた事だった。今ここには、かつて2人だけの知っていた空気があった。

「先輩…」

「それにね、どうあがいてもムダだと思うわよお」

「え？」

谷村の声に面白いような響き加わる。

「山本監督、彼ね、なかなか凄いわよ。甘く見ちゃだめ。今回の話もね、きっかけはウチの送った動画だけど、出演に関しては彼の強オ～烈なプッシュがあったのよ。直接学校に来て理事長も説得したの！」

「本当ですか！？」

「彼、どお～おおあってもあの意匠で女戦闘員を通すつもりよ。ま、男が顔出してるのに女が覆面てのも変なものね」

「そもそもそれで揉めたんです…」

「やられザコ役で顔出すのってそんなにイヤかしらねえやっぱ？私なら演技の幅が広がって大歓迎だけだね。まあ監督にも考えあつての事でしょ？私は作品を見てて何となくわかるけどな」

「もちろんそれは解ってます。でも、そう簡単にはいかないんです…」

「なんでよ??」

相手の深刻な様子を訝り、谷村が問う。だが永田は答えなかった。

「…やっぱり先輩は凄い人ですね。指導者としても、演技者としても…見ましたよ、中国拳法の…」

「あ～玉川さん撮ってたのかやっぱり～。いやぁお恥かしい…肉ついたでしょ私？」
「さすがにあれじゃ男に混じって戦闘員とかもうできませんね。あの頃も相当むちゃでしただけど」

2人は笑った。

「…すみません。今回の件は谷村先輩に文句を言う事じゃありませんでした」

「ま、いいのよ。少しでも京子ちゃんの気が晴れたんなら」

「もう一度、監督とよく話し合ってみます」

「そうなさい。妖魔メイド長ヴェドルチェさん！」

その名で呼ばれると永田は恥かしげに微笑んだ。

「また例によってああいう役なんです…」

「そういうイメージも大切よ。観る人たちに覚えてもらうにはね」

「はい」

にや～りと笑う谷村。

「今回はまた”乳解禁”ね」

「先輩～」

スーツの胸元を両手で隠して永田が身を退く。

「良かったじゃない。王子様の時は、さらしの巻き過ぎで鬱血しやしないかって、見ててハラハラしてたもの」

「そんなわけありますか！まぁ確かにキツかったですけどね」

「顔は凜々しいけど、ムネはしっかりあるのよねえ」

「でも私としてはクラビウスみたいな方が…女忍者の時もそうでしたけど衣装の露出度がやたら高くして…特に今回は胸元がオープン過ぎるし、おへそも見えてるし…それこそ演じてる私がハラハラしどうしです」

「男の子には刺激が強過ぎるわよねえ。あれって誰がデザインしたのかしら？」

「デザインチームの誰って言うより…監督が相当口を出して…」

谷村が吹き出す。

「なるほど、”監修、山本修三”ってわけね」

「先輩…どうして」

その時、上映室の扉が勢いよく開き、中から御馴染みのヒゲ面がのぞく。

「お二人さん、何してんの？もう打ち上げに行ってもいいのかな」

「ほら、噂をすれば…」

顔を見合わせる2人。

「ん？なんですか？」

「いえ、なんでも」

そしらぬ顔の谷村。

「ははあ、さては僕の悪口でも言っていましたね？」

「…えーと、ああ！つまり作るのにお金をかけ過ぎたと？」

「そういうこと！」

谷村が思わず吹き出す。山本も笑う。

その様子を離れた席から静かに見詰めるのは永田京子だった。彼女は考えていた、先刻、上映室の外で訊こうとした事を。だがそれはかつて東亜で別れ際に幾度も幾度も激しく問うた事だった。

「(先輩、どうして東亜をやめたんですか?)」

無言で問いかける視線。その様子を傍らで見ていた沢田と永野は顔を見合わせて首を傾げるのだった。

「ではデルタダガー第25話が無事完成した事を祝して、そしてその完成に大きく貢献してくれた白華女子学園アクション研究会のみなさんに心から感謝を込めて、カンパーイ！」
『かんぱーい！！』

音頭をとった山本の声に会場が沸く。

ここは山本MSビルの社員食堂である。社員食堂とは言っても清潔なだけで味気ない一般的イメージと違い、淡い暖色系を基調に天然木素材を要所に配し、くつろいだ雰囲気 of 快適な空間となっている。”趣味の良いファミリーレストラン”と言ったところか。パイプ製でない、しっかりした造りの椅子は、大きな背もたれで座り心地が良い。今は貸切りだが、普段は一般にも開放されていて、近隣の住民がよく利用している。テーブルは並べ替えられ、奥の配膳カウンターの正面に大きく長い”島”が2つ作られている。

コップを差し上げるのは白華の少女達、そしてデルタダガー制作チームの面々や、主要出演者として葉山光一、早瀬香織、永田京子、つまりは今日ここにいる作品関係者の全員が揃っている。

ほんの数刻前、その長テーブルに並べられた料理の数々に少女たちは茫然としていた。

「なんか…すごく立派にレストランなんですけど…」

「学食と全然ちがう～！」

和・洋・中華とりまぜて、所狭しと並べられたご馳走の数々。谷村もめんくらっている。

「社食でささやかな一席を」と言われて想像するような光景ではない。

「こ、これは…私、ちょっとしたお茶会みたいなものを想像してたんですけど…」

腕時計を一瞥する山本。太い腕に相応しい堂々たる代物だ。

「…時間なら、まだ大丈夫でしょう？」

「いえ、そういう事でなくて…」

「どういう事です？」

山本がにっこりする。いたずら坊主の表情だ。

「とても食べ切れません」

思わず爆笑しそうになって両手で口元を押える。

「プ…ク…先生もなかなかやるじゃありませんか、この僕に不意打ちをかけるとは…」

「ウフフ…いや、冗談はさておき、どういう事ですか！？この凄いご馳走は??」

山本は姿勢を正して谷村に向き直る。穏やかな微笑み、だが目は真剣だ。

「先生、これくらいはさせてくださいよ、僕は未だにノーギャラって納得してないんですから」

「それは…」

「理事長さん、その点だけは頑として認めてくれませんでしたね…出演そのものには理解を示して下さったのに…」

「我が校の規定ですからね。うちだけ特別というわけにはいきませんわ。それに”営利行為を認めない”というのは部活動の趣旨からすれば当然ですから」

「そんなぁ、経済活動への参加も重要な学習要目だというのが最近の潮流でしょう？」

「あらよくご存知ですね。まあ白華はその点古風ではありますね。でも私、悪いとは思いませんよ。別にお金が貰えなくても、あの子達は演技に本気だったでしょう？」

「だからこそ申し訳なくて…食べ物で誤魔化すなんてまねはしたくなかった…」

「誤魔化すなんて、見てください、嬉しそうなあの子達…それに、今日の見学だって特別の計らいじゃありませんか。それこそお金には代えられない貴重な経験ですわ」

ご馳走の山を前に色めきたつ少女達。

「うう、目移りして攻撃目標を決められない…」

「うは！匂い嗅いだだけでお腹が鳴ったよ！」

「やっぱり始める前に社長の長～い挨拶とかがあるのかなぁ？」

部長と副部長が部員たちに指示を出す。もちろん今は沢田亜紀も純白の制服姿だ。

「炭水化物は後回しにして血糖値の上昇をなるべく引き伸ばすのが量をかせぐコツよ～」

「あんたたち、よだれ垂らしてないで、とっとと席につく！晴海い…テレビの大食い選手権じゃないんだからさあ…」

「あらぁ、でも大食い大会にしないと、せっかくのお料理が半分は無駄になってしまいそうよ」

「食べ切れなかったら持ち帰れるようにしてあげるから心配いらないよ」

「あ、如月さん」

振り向くと、そこに立っていたのは微笑をうかべた如月真だった。

「それって、なんだか田舎の結婚式みたいですね…」

沢田の言葉に如月が苦笑する。

「ちょっとやり過ぎだったかな？相撲取りやプロレスラーじゃないんだしね。でもこれについては僕も社長と同じ気持ちかな。それくらい君達には感謝してるんだ」

真の真剣な眼差しに思わず恥らう2人。

「そ、そんなぁ、私達、デルタダガーに出させてもらえただけで光栄って言うか、未だに信じられないくらいなのに、感謝だなんて…」

「そうですよ、感謝するのは私達の方です」

如月真は黙ってかぶりを振った。

「もう始まると思うからちょっと待ってね。楽しんでもらえると嬉しいな」

そしてほどなく「乾杯！」の一声で宴は始まったのだった。

「制服が汚れるかもしれないから、ナプキンが欲しい人は言ってね」

「大丈夫です！私たち普段から学食で鍛えてますから！」

「カレーうどん5分食い10杯連続でも汁はねゼロ余裕です！」

心配する如月に力強くVサインで応える少女達。

「す、すごいね（10杯食べるの？カレーうどん…）」

凄いのは確かに食欲でもある。

「おいしい！おいすぎるう！」

「今度はこれとこれとこれとこれと…」

一心不乱に動かされる手と口。谷村が苦笑する。

「あんたたち、餓鬼じゃないんだからもう少し優雅にいただきなさいよ」

「いいんですよ。これだけいい食べっぷりだとこちら嬉しい。それより、すみませんね、お酒抜きじゃ先生は物足りないでしょう？」

「いえいえ、教師たるもの生徒の前で酔っ払うわけにはいきませんもの」

山本の言葉にそう言って笑う谷村は、ふと相手の視線に注意を引かれる。

「何か待ってらっしゃるんですか？」

「ああ！いや！」

驚き、少し慌てる山本。

「どうしてそう思われたんです？」

「もしかして、さっきから時計を気になさってるのかなと思って」

「ええ、ちょっと…」

その時、くぐもった唸りが小さく聞こえた。

「あ、ちょっと失礼」

言うなり席を立ち、そそくさと部屋を出る山本社長。

「(携帯のバイブレーション…待ってたのはあれか)」

「凄い…」

フォークに刺した一切れのミートローフをじっと見つめる亜紀。

「どうしたの？ミートローフに見とれて」

「いや、これ、プロとしても相当の腕だなと思って、あ！！」

横合いから永野晴海がパクリ、ミートローフは強奪されたのだった。

「ふおんほうにおいひいわおえ～」

口をもぐもぐさせながら頷く晴海に冷やかな流し目をくれる亜紀。

「今おまえの体重は50グラム増えた！」

「ふぐっ！」

「加えておまえのウエストが3ミリ増えた！」

「んぐう…！！」

必死に飲み込むと晴海はコップをあおった。

「ふうう～亜紀ったらひどい！」

「あんた、調子に乗ってるとまたダイエットで泣く事になるわよ」

「そんな～、質量はともかくとして、ウエストがいきなり増えるわけないでしょ！」

そう言いつつ心配げに腰周りをさすって確かめる。

「ま、晴海がブタへの道をまっしぐらになっちゃうのも無理ないな」

そばで「イ〜だ」なんてやっている友を無視し亜紀は言葉が続ける。

「たとえばこのミートローフ、ひき肉の他にもレバーとか色々な材料を使ってる。それでいて全体の味はぴたっとバランス良くまとまってるし、食感とか、口に入れた時に広がる風味とかにまで配慮が行き届いてる」

「ふ〜ん、レバーなんて入ってるんだ。気付かなかったな」

と言いつつ今度は自分で更にもう一切れ、亜紀の白い目線は優雅に無視。

「そりゃレバー料理ってわけじゃないもの。モツ系の食材を加えると味に厚みや深みがぐっと増すのよ。でも上手くやらないとレバー臭くなったり、それを消そうとして香辛料がキツ過ぎたり、けっこう高いお店でも、そういうのが平然と出される事あるよ」

「ああ！なんとなくわかる。凝ってる味とは思っただけど、美味しいかって言われると首を傾げちゃうような…」

「そうそう、でもここに出された料理はどれも素直に”凄く美味しいっ！”って思うよね。誰にでもすぐ解る美味しさなのに、しかもそこには魔法があるの、”何でこんなに美味しいの!?”って言う。本当に感心する」

「部長さん、料理に詳しいんだね」

2人が振り返ると、いつのまにか如月真が来ていた。

「いや、そんな、詳しいなんて、ただその、家が…」

思わず恥らう亜紀。と、ここで晴海が割って入る。

「亜紀のうちはおそば屋さんなんです。地元じゃ有名な老舗なんですよ！」

「へえ凄いね！それじゃ味にうるさいわけだ」

「そ、そんな！ごく庶民的なフツのそば屋です！」

「あら〜？普段は”東京の有名店よりウチの方がずっと美味しい”なんて豪語してるじゃない」

ここで如月がポンと手を叩く。

「ああ！思い出した！社長が君達の学校へ行った時”現地でバカうまいそば屋を見つけた”って、ひょっとして”みのや”さん？」

「ええ！？山本さんうちに来たんですか??」

目を見開いて亜紀が驚く。

「あ、やっぱりそうだったんだ。盛りそば3枚にカツ丼まで食べたって言ってたよ」

「うわあ…」

亜紀の頭に山本のダルマ体形が浮かぶ。

「定食もおいしいんですよ！ごはん大盛りタダなんです！」

晴海が付け足す。

「出たな大盛り魔人！いや、そんな事はどうでもいいんです。自分で言うのもなんですけど、確かにちょっと味にやかましいところがあって…でも、このお料理は心底おいしいっ！」

って思います。全部ここのコックさんが？」

如月がにっこり笑う。

「そうだよ。そんなに褒められると僕らも鼻が高いな。社長が” 食べ物が活力の基本だ！それがダメなら何もかもダメになる！」って、まあ、山本さんも味にはうるさい人だから…ところで沢田さん、もしかして自宅通学なの？」

「あ、はい」

「あれ？白華って全寮制じゃなかった？」

この質問には晴海が答える。

「地元生まれの在住者なら自宅通学可っていう特例があるんです。でも審査が厳しいから全学年でも十人くらいしかいませんけどね」

「へえ！」

「む〜」

相原麻美がフォークをくわえたまま眉根にシワをよせる。

「何か足りない…」

「え！？美味しいじゃん！これ充分みや級だよ！」

隣に座る親友の野川優子が異を唱え、フォークに刺した料理にかぶりつく。それは大ぶりの車えびを薄い皮に包んで焼き上げたものだった。かりっとした皮の中にぷりっとしたエビ。間に薄く挿まれたソースが皮と身の仲をとりもち、華やかなハーモニーを生み出す。舌で感知されたその素晴らしい刺激は神経パルスとなって優子の脳を駆け巡り、その多感な皮質を鮮烈な快感で満たした。

「ん〜っっ！おいしいっっ！」

身を震わせて感激する少女。傍らの麻美にもそれは十分に伝わる。

「それいったい何？どんな味だった？」

「ん〜…チリソース味かな？見た目は変わってるけど要するにエビチリ？すごくうまいよ！」

「お〜、じゃあ私も1つ…」

「そうではなかろう」

ここで貝田沙希が口を挿む。やはりこの場でも3人一緒だ。

「え？」

「何か物足りないという話ではなかったのか？」

「あ、そうそう」

「私の思うにそれは料理の話ではなくこれではないか？」

そう言うと沙希はムービーカメラを構える格好をした。表情が実に怪しい。

「あーっ！」

「わかった！」

『タマっちがいない!』

最後は見事にハモる。

「うむ」

沙希が重々しくうなづく。

「制服マニアの間で『深奥の白鳥』と珍重される超レアな獲物が、こんな群れをなしているというのに、この状況を玉川氏のピュアな下心が放っておくのは不自然」

2人もうんうんとうなづく。

「撮影の時、そのままリハできるように動きやすい私服で行ったら、玉川さん泣きそうな顔してたもんね」

「そう言えば今日一日どこにも見かけなかったなあ」

麻美と優子は食堂を見回すが、やはりそこにあのお調子者は見えない。

「テーブルの下に潜んでパンチラを狙ってるとか～」

そう言って実際に覗き込む麻美。もちろんいるわけがない。

「タマちゃんを探してるの？彼ね、今日とても大切な用事があるって出かけてるのよ」

「お？」

3人が振り向くと、声をの主は早瀬香織だった。

「早瀬さん、じゃあタマっち本当にいないんだ」

「大切って、当然仕事ですよ？」

「ええ、社長じきじきのね。だから親の死に目より重大な…ってこれはタマちゃんの言葉だけど、今日の見学会を泣く泣くあきらめたの」

『ほー』

顔を見合わせ感心する3人。

「玉川^{うじ}氏が社長の特命を拝するような御仁とは意外」

「ただのコスフェチカメラ小僧じゃなかったんだ」

「こらこら」

香織が苦笑する。

「おや？そういえば山本社長の姿も見えないようだが…」

沙希の言葉に周囲を見回す香織。

「…さっき谷村先生と一緒にいたと思ったんだけど…その谷村先生も姿が見えないわね…」

早瀬は何か気になる様子で出入り口の方を見ていた。

パンっ！と張りのある音が響いた。

「卑怯よ！！」

永田京子は怒りに震える手を山本社長に突き出した。握り締められているのは携帯電話だ。黒の高機能タイプである。

「こんなやり方ってないわ！！」

「…」

赤くなった頬をかばいもせず、山本は眼を伏せて黙ったままだ。

食堂にほど近い会議室。会議室はいくつかあるが、ここは飲食物の調達がしやすい場所に設けられた一室だ。折りたたみ式のテーブルと椅子、正面奥には大きな白板。中には今2人しかいない。

「やってられないわよ！！」

そう吐き捨てると怒りを込めて携帯をテーブルに叩きつけ、永田は踵を返して扉に向かう。

「京子！」

そう言って引き止める山本の腕を永田は猛然と払いのける。そのあまりに強い力に驚きたじろくが、すぐに後を追って部屋を出る。

「待ってくれ！」

そして再び背後から両の肩を掴む。

「頼むよ！」

今度は足が止った。だが、手から伝わる震えを感じると山本の表情は悲しげに曇った。

「私、馬鹿みたい。今日が決戦だって気合入れて来たのに、あなたの方ははなから私を相手にしてなかったなんてね」

「京子、僕はね…」

「これが一緒に作品を作る仲間に対する仕打ちなの！？」

そう叫んで向き直った京子の目には涙が溢れていた。彼女のそんな顔を見るのは初めてだった。山本は息をのみ、しばしためらったが、やがて口を開く。

「君は、この件で譲る気は全くなかったろ？最初から。確かに、内緒で円条社長と直接交渉なんて公正なやり方じゃないよ。でも他に方法は無かった」

京子がかぶりを振る。

「顔が露出してる戦闘員なんて、昭和の昔に僅かな例があるだけじゃないのよ。なんでそんなにこだわるのよ？」

「何度も説明したけど”デルタダガーだけが仮面”というところに意味があるんだよ。作品の主題を象徴してるんだ。君こそなんでなんだ？ああいうカッコでああいう演技って、そりゃ女性には恥かしいのかも知れないけど、あの白華の子達の姿を見て、君は何も感じるものがないのかい？」

山本の声も眼差しも穏やかだった。その視線は真っ直ぐに京子の目を見据えていた。彼

女は唇を噛み、辛そうに目をそらす。

「僕は思ったんだ。君が、AAAをインディーズ系の作品に、円条社長の反対を押し切って参加させたのは、君にも彼女達と同じ熱意があるからだって。それは僕の勘違い？あれは日銭を稼ぐために仕方なくやった事で、やっぱり円条さん同様に恥だと思ってるの？」

「ちがうわ…」

答える京子の声は弱々しい。

「そうじゃないのよ…」

うなだれる京子。スーツの広い両肩を太い指がそっと抱く。京子は、はっと身をすくめる。山本がじっと見つめている。上向き気味なのは少し格好がつかないが仕方ない。山本もいい体格だが、何せ姫君は180センチ超えだ。

「これから僕の言う事が間違っていたら、そう言って」

「…」

「君は、僕の考えに反対じゃない。君は作品を良い物にしたいと本気で思ってるし、戦闘員の件も君自身は理解してくれている。女優にとってこういう形で顔を晒すのは受け入れ難いとか、芸歴の傷だとか、そんなのは本心の言葉じゃない」

京子は眼を固く閉じ、顔をそむける。

「反対する本当の理由を君が言ってくれないのには、きっとそれだけの理由があるんだろうと思うよ。だから聞かない。でも、それは君にとって一番大切なことじゃないよね？」

「え？」

怪訝な顔で向き直る京子。そこには見慣れた髭づらがあった。愛すべき男の頼もしい顔が。

「一番大切な事は、君と僕と一緒にだもの」

京子はびっくりして思わずひくっと鼻をすする。その仕草は外見に似合わず少女のようだった。そしてその瞳が再びうるむ。

「君の力が必要なんだ…」

山本の両手が肩から背中へとゆっくり回され、優しく、抱きしめる。

「(あ、あの2人ってそういう関係だったの～！?)」

思わず声が出そうになり口元を押える。通路の影で茫然としていたのは谷村美津子だった。

角から覗くその向こうでは山本と谷村が互いを強く抱擁し、やがて向き合った2人の顔が接近する…。首を伸ばし、食い入るように観察する谷村が、ごくりと唾をのみ込む。

「(う、うわ、うわわ～)」

その時、夢中になっている女教師の肩を誰かが叩いた。

「っっ！！」

驚きの悲鳴を今度もどうにかこらえ、慌てて後を振り向く。

「いけませんよ、の・ぞ・き・は（ハート）」

「は、早瀬さん!？」

そこに立っていたのはニコニコ顔の早瀬香織だった。

「誰がいるんです？社長？」

ダメだと言いながら自分も覗こうとする香織。

「わ、わ、ちょ、ちょっと待って！」

押し殺した声で必死に押し留め、相手の肩を背後から掴むとそのまま回れ右して廊下を
どンドン押してゆく。

「あ、谷村先生、何をなさるんですか!？」

「しーっ！声が大きい！」

どンドンどンドン押してゆく…。

かすかに芳香剤の香る中、洗面台の大きな一枚鏡に映っているのは2人の美人。肩を落
として大きく息をつくのは谷村美津子。

「もーおびっくりしたわよ!!」

それをいたずらっぽく目で見ると早瀬香織。

「社長と永田さんの仲は、まあ、みんな大体は知ってるんですけどね…」

ここは先刻の場所からちょっと離れた化粧室である。とりあえず早瀬をここまで押して
来たのだ。

「風雲の忍”雷王”に忍者将軍黒刃で出演してもらったのが2人の出会いですけど、その
頃から噂はありましたから」

「そうなんだ…」

何事か考え込んだ様子で相手をじっと見る谷村。

「(いや、びっくりしたのはその事だけじゃなくてね…)」

「…で、何で先生はそんな大人の逢瀬を覗いてらしたんですか？」

「あ、いや!その…」

おもしろそうに訊ねる早瀬にあたふたといきさつを説明する。

「そうですか…永田さんが…」

香織はそう言って視線を落とした。

「なーんか山本さんの様子が怪しかったし、戻って来たと思ったらコソコソ京子ちゃ…永
田さんを連れ出すし。実は今日、彼女とちょっとあって、それもあって…」

「覗いた、と？」

悲しげな顔が一転、にやり、と意地悪い笑み。

「いや!だから!心配だったし、そりゃ、私が口を出す事じゃありませんけど」

「そんなに慌ててえ、ははあ…」

いや～な流し目。

「な、なんですか？」

「実はお2人、東亜の頃はただごとならぬご関係だったとか？」

一瞬、きょとんとする谷村、が、言葉の意味を悟ると思わず嘖き出し、それから早瀬の背中を豪快にぶっ叩く。

「お`ふっっ!？」

あまりの勢いに前のめりになる香織。

「いっやあだ!何言ってるんですか早瀬さ~ん!現実にそうそういるわけないでしょ?そんな人。オタクの妄想の世界だけですって!」

咳き込む相手をよそにカラカラと笑う谷村。と、ここで一転、真顔になる。

「それに、実際予感的中というか…ありゃただ事じゃないでしょうよ。早瀬さん、あなたそらとぼけてるけど、何かご存知じゃないの？」

そう言われると早瀬はちょっと困った表情で目を逸らす。

「それは、まあ…見当もつかないとは言いませんけど。でも、仕事の話だし、社長から正式に何か聞いてるわけではないし、その立場でもないのに憶測でいい加減な事を言うわけには…あの、谷村先生は今回の件で、社長からある程度の事情は説明されてますよね？」

「…ええ」

谷村は頷く。

「そちらに出演をお願いしたのも元々はその揉め事がきっかけだったわけで、これ自体けっこう無茶な、いわば”奇策”です」

「そうよねえ、アマチュアの高校生を代役に使うなんて」

苦笑する香織。

「でも、永田さんの態度も相当強硬でしたから。社長、たぶん他に何か手を打ってたんじゃないかと思います。今回は白華のみなさんのおかげで切り抜けられ、いえ、それ以上の成果でしたけど、でも肝心な事はちょっとだけ先延べされただけですから…」

谷村は複雑な表情で考え込む。

「なるほど…それで結局は山本さんの策が図に当たったわけね、あの様子じゃ…」

「すみません。社長、こうと思ったらテコでも動かないんです」

「たとえ恋人を泣かせても、ですか」

ふっと息をもらす谷村の顔には微笑みが浮かんでいた。

「たいした男^{ひと}ね、私も惚れちゃいそうだわ」

「えー!？」

信じ難いという顔で谷村をまじまじと見る香織だった。

「今日はいいものを見せてもらった」

しゃがれ声でそう言ったのは窓の外を眺める老人だった。カーキ色の開襟シャツにゆったりしたズボンといういでたちは、人物の雰囲気とあいまって、どこか軍人を思わせる。その額は禿げ上がり、うねる白髪が頭部の後方へ炎のように流れる。眼鏡の奥の眼光は鷹の様に鋭い。その視線は眼下に広がる都心のビル群を超え、彼方の地平線に落陽を見据えていた。天地を鮮烈に染める光は広い1枚ガラスを通り、その紅い領野を社長室にも投影している。

そのしつらえ。マホガニーの大きな机や肘掛のついた革張りの椅子などは通俗的な社長室のイメージそのものだが、壁に飾られたヘラジカの頭部や、仁王立ちで今にも襲い掛かってきそうなハイイログマの剥製、刀架に置かれた日本刀などは、いささか危険な業界の事務所風である。

そしてこの”エキゾチック”な部屋にはもう1つの人影が…。

「いえこちらこそ、アポも取らずにいきなり押しかけてすみませんでした」

声に答えたのは老人から見れば息子にしても若すぎる青年だった。スーツをきちんと着た姿は普段とまるで印象が違う。

「いきなり君1人で来るとは驚いたよ、玉川君」

「何しろ奇襲ですから」

そう言って玉川はにっこり笑った。

「永田め、今頃カンカンだぞ」

向き直った老人は両の人差し指を角のように立てて笑みを浮かべる。

「そりゃあそうですよ。頭越してだけでも立場ないのに、ましてや円条社長のあの容赦ない仰りようたら…」

「あれぐらい言ってやらんと折れんよ、あいつは。…それにしても君、現場をうろちよろしとるただの小間使いかと思ってたら、あの山本がこんな密使を任すような男とはな。いわゆる懐刀というやつか？」

「と〜んでもない！そんなこと言ったらみんな爆笑ですよお」

手をパタパタと振って打ち消す様子はいつものタマっちだ。

「僕は山本の指示に従っただけです。だいいち僕、永田さんを何で”説得”してくださったのか今でもよく分かってないんですから」

「なんだ、そうなのか？」

ふっと息をつく、円条は再び外に視線を移した。

「何のことはない。”意気に感ず”というやつだ」

「意気に感ず、ですか…」

老人の背を見詰める玉川の視線には敬意がこもっていた。この人こそは平成の特撮王、業界最大手、東亜メディアエンタープライズの現社長、円条兵太郎である。

「山本のやつ、最悪私があれを丸ごと却下したらどうするつもりだったんだ？いくら高校

生のボランティアを使おうが、自腹で全損となればタダでは済むまいに」

「本当にもう、無茶苦茶をしてすみません。社長の寛大な計らいには大感謝ですよ」

円条は再び玉川を振り返ると、やれやれという様子でかぶりを振る。

「逆だ。寛大でないからこそ永田のメンツを潰して山本の意見を通した。それにしても…」

円条は瞑目する。その脳裏にデルタダガー第25話の映像がありありと甦る。そして再びまぶたが開いた時、この男が滅多に見せない優しい光が目にも宿っていた。

「意気を感じずと言ったが…それは何よりあの子達の熱演に負う所が大きいな。山本の言いたい事もだからこそ伝わったのだ」

その言葉を聴いた玉川の顔にも自然と優しい笑みがこぼれた。

「すごいですよね、あの子たち…」

「あれから、もう8年か…まったく、谷村め…」

「それって、谷村先生が東亜剣撃会をやめてからってことですか？」

問いには答えず円条は言葉を続ける。

「やはり、AAAには谷村美津子の力が必要だった、いや、もともと彼女の為の計画だったのだが…」

「そんな、永田さんだって立派にやってるじゃありませんか」

ふっと息をつく、円条はゆっくりと天井を見上げる。

「あれの頑張りを、認めないではない…だが…」

「だが？」

首をかしげて先を促す玉川。

「…君は、あの演技を直に見たのだろう？」

「え？ええ…」

「どう思ったかね？」

「どうもこうも…僕がこの業界に入ってから最高の体験でしたよ！」

「そうか！」

老人が笑う。

「いやあ、若い子って凄いですよ。こう、エネルギーがほとばしるんです！あれは映像じゃ伝えきれません。青春の発露って言うんですかねえ…プロじゃああまで出来ないかもって、プロの僕がそんな事言っちゃいけません」

「ああいう後先考えぬ捨て身の熱演は確かにアマチュアリズムの精華ではあろう。だが本物のプロなら、あのひたむきさに通ずる真剣な心構えがあってしかるべきだ」

「つまりその…AAAは本物のプロではない、と？」

円条の表情が曇る。しばしの沈黙。

「”プロ”なのかも知れないが…」

再び言葉が途切れると、社長の眉間に深いしわが刻まれる。

「…？」

それから口を開いた円条は唐突な話を始めた。

「私が現役の際は相当むちゃをやらされてな。そりゃもう全身ケガが絶えなかった…。だがどんなに頑張っても、当時は子供番組なんて、世間はもちろん、業界でも馬鹿にされていてな、私は” なにくそ ” という負けん気で、それこそ泥まみれになって奮闘したさ。白華の子供達の演技を見ていたら、久しく忘れていたそんな大昔の熱気を、思い出したよ」
「…」

玉川は黙って聞いている。

「…谷村と頑張っていた頃の永田ならわかるはずだ。いや、今でもわからんはずはないと思うんだが…」

玉川は驚いた。この社長が溜息をつく姿など想像もつかなかったからだ。

谷村と早瀬が出て行ってしばらく後の事である。同じ化粧室に入ってきたのは永田京子だった。もう泣いてはいない。

彼女はまず洗面台の前に立ち、くずれた化粧を直す。乱れを拭い、ファンデーションを整え、口紅を引きなおす。鏡に映る自分の顔を見詰め、仕上がりを確認する。それから今度は真っ直ぐ奥へ進み、いちばん端の個室へ入る。鍵をかけ、蓋を下ろしたままの便座に腰かける。

多くの視線を釘付けにしてきた豊かな胸元に手を差し入れると、取り出したのは携帯電話だった。深紅色のスリムなデザインで、簡潔だが高品位な意匠が見て取れる。京子は、それを両手に持ってしばしじっと見詰める。と、突然天井を仰ぐように大きく息を吸い込み、そして再びキッと携帯を見据える。意は決した。本体を開き、番号を打ち込む。この発信先は電話帳に入れていないのだ。受話器を耳に当てる。呼び出し音が聞こえる。1回、2回、そして3回目が鳴り終わった時、相手が電話を取った。

『首尾は？』

挨拶抜きの第一声は聞き覚えのあるアルト。

「失敗しました。申し訳ありません」

京子は即答する。

『あら？』

少し面白いような響きが相手の声に加わる。

『絶対に大丈夫とか言ってたのに、どうして？』

「山本修三は円条社長と秘密裏に直接交渉していたのです」

『なるほど。詳しく話して』

京子は事の一部始終を簡潔に説明した。

『やるじゃない、あなたのカレシ』

受話器の向こうから、あははと笑い声が聞こえてくる。

「その立場を利用するつもりが、逆に油断となったかも知れません」

『まあ、元々あなたの個人的な関係だからね』

「それで、これからの対応ですが」

『うん』

「代役を新たに増員するのはもう時間的に不可能です。それに、事情を知らない人間を内部に抱える危険は冒したくありません」

『そうね』

「そこで、私を含めたフロントチームとは別に、端役専門の人員を7、8人選出します。コスレンジャーの主演連中に下っ端戦闘員を今更させられませんか」

『とすると、事務所の顔であるあなた、主役に選抜した5人、それに加えて8人、総勢14人の顔が全国のお茶の間に披露されるわけね♪』

「はい…」

『困ったわねえ…』

「今回の戦闘員役は顔全面に濃いペイントを施します。これだけでも相当に素顔は隠蔽されますし、このケース自体が極めて異例の事で、今後はまずないと考えます。それに今回についてもシリーズの後半、しかも実際の出番は更にその半分もありませんから、暴露により将来増加する危険も小さいと思われます」

そう説明すると、京子は相手の応答を待つ。しばしの沈黙、それは永遠の長さに感じられた。

『”小さい”、ね…、あなた、小さいなら構わないと思ってる？』

ぎゅっと唇を噛む。携帯を持つ手に力が入る。

「いいえ。部下の命にかかわることですから」

そして再びの沈黙。

『オッケー。わかったわ。あなたにまかせる』

「…ありがとうございます」

『ほっとした？』

からかうような相手の声。

「はい」

京子は正直に答えた。受話器の向こうからクスクスという笑い声が聞こえてくる。

『ま、役柄と違って本当は”正義の秘密結社”なんだから多少は堂々としても罰は当たらないかしらね』

「”ユニオン”は公然で合法の団体ですよ」

『京子、滅多な事でその名前を口にしない』

その言葉を聞いた途端、相手の口調が鞭のように鋭く、氷のように冷たいものに一変する。背筋が冷やりとする。

「失礼しました…」

『公式には、あなたたちと我々の間に関係は一切ないわ。あなたたちに何があったとしても当方は一切関知しない。わかってるわね』

「…はい」

京子は自分の失言を悔いた。幸い、相手もそれ以上の叱責はせず、何事もなかったかのように態度が戻る。

『よろしい。じゃ、そういうわけだから、人選が済んだら連絡ちょうだい』

「あ、その…」

『悪いわね、実は今”接待”の最中なのよ。他はまた改めて。バイバイ』

一方的に通話が切れる。携帯の画面を見つめ、切れた事を確認する京子。

個室の静寂の中、ほっと息をつく。通話履歴を消し、携帯を閉じて懐にしまう。

「(よしっ!)」

立ち上がった京子には本来の力強い生気が戻っていた。

「今日は本当にありがとうございました」

そう言って谷村は深々と頭を下げた。

『ありがとうございましたっ！』

背後にずらっと勢ぞろいした少女達も続いて一斉におじぎする。

山本MSビルの玄関ロビーはそれなりに広がったが、30人からの少女達が集まるには少々手狭だ。それは湖面に群れる白い水鳥といった風。

総ガラス張りの前面は残照に染まっている。昼間、彼女達が来た時には射し込む陽光で十二分に明るかったが、今は天井パネルの埋め込み照明が灯っている。

特撮ファンの注視を集める制作会社だが、そういう企業が来客にアピールするための展示、たとえばポスターや立て看板などは見当たらない。よく見ると、正面の受付カウンターの上にデルタダガーの小さな人形と卓上カレンダーが置いてある。

そのカウンターの前には、社長を始めとする山本ワークスの面々が見送りに来ている。

「みんな、今日は楽しんでもらえたかな？」

『はい！』

少女たちの元気な答えに、にっこり頷く山本。その山本に谷村美津子が深々とお辞儀をする。

「本当にありがとうございました。あんなごちそうになった上におみやげまで頂いてしまって…」

少女たちは各々手提げ袋を持っている。厚手のクラフト紙に黒一色という渋い仕様で、図案化されたデルタダガーが刷られており、“Yamamoto Works”というロゴが下のほうに入っている。

目を輝かせている彼女たちの様子から見れば、中身がいかばかりか知れようというもの。

「そんな、販促品の余り物ですよ。あんなに喜ばれて逆に恐縮です」

すまなそうに頭を搔く山本。

「(わかってない、わかってないよ社長！)」

「(非売品だから良いんじゃない！)」

「(ここの販促物って、大手即売会とかアキバのイベントとかじゃなくて業者向けの発表会とかでしか配らないから超レアだし)」

「(しかも水準高いし！一般の販売物と違って企画・デザインを社内でやってるのよね、これ)」

山本の心配をよそに、もらった方は大興奮である。

「すみませんね、遅くまでひきとめてしまって。これじゃ向こうに着く頃には真っ暗だな～」

山本が頭をかく。

「いえいえ、そのための引率ですから。それに、あんな御馳走をふいにしたら、この子達にどんだけ恨まれるかわかったもんじゃないよ」

谷村の言葉を聞いてヒゲ社長の脳裏に宴の激戦が甦る。

「(食べきったよなあ、あの子たち…)」

大の男でもひるむような皿の数々を、白華の少女たちは見事平らげて見せたのだった。

「(特にあの副部長さんといったら!)」

山本の視線は永野晴海へと向かう。晴海は自分の手さげ袋からデルタダガーのフィギュアを取り出し、それを嬉しそうに見せながら部長の沢田亜紀と何事か話している。彼女の”静かなる暴食” …。

「(にこにこもぐもぐしてるあの子の周囲から食べ物がどんどん消えていったよなあ…”太るぞ!” って注意してた亜紀ちゃんも途中であきらめちゃったし…)」

思わず笑みがこぼれる。

「どうかしました？」

「あ、ああ！いえ、なんでも」

怪訝な顔の谷村に山本は慌てて手を振る。

「先生、そろそろ発たないと本当に真っ暗になっちゃいますよお」

「あら本当ね！」

生徒の声に外へ目をやり焦る谷村。

「ではそろそろおいとましますね」

「あ、そういえば全寮制ですからね、門限とか大丈夫ですか？」

心配な顔になる山本。

「休日の門限はけっこう遅いので、まあ時間としては間に合うんですけど、着く頃にはもう真っ暗でしょうから、寮母さんにはだいぶしぼられそうです」

そう言って女教師はあははと笑う。

山本は受付カウンターに近づき、中に声をかける。

「ミコちゃん、電車の時間見てもらえるかな？」

若い女性事務員が壁に張ってある時刻表を見る。最寄りの駅はこの辺りで最大の分岐点なので、各路線ごとに何枚もある。

「十日市鉄道ですよね、え～と^{はいばら}榛原方面は…」

彼女は、貼ってある中で一番ちいさな表を見ている。距離こそ結構あるが、この町は主要路線で都心と直結している。一方、十日市鉄道は反対方向へ向かうローカル線なのだ。小さな表に数字もまばらだ。

「…今からだと5時半の電車がいいんじゃないかと」

「とすると榛原に6時、^{たつがみ}竜神に着くのは7時頃ね」

谷村が計算する。

「それじゃもう行かないと。みんな、出発するわよ！」

『はい！』

いそいそと帰り支度を始めた少女達を葉山光一が眺めている。

「名残惜しい？」

悪戯っぽく早瀬香織がたずねる。

「…ん」

「なによその生返事は？」

「あ、ああ！さびしくなるね」

香織のいぶかしむ目線。

「な～んかおかしいのよね光一。あの撮影以来」

「そ、そうか？」

「葉山さん！早瀬さん！」

元気な声に振り向くと、沢田亜紀が大きく手を振っていた。傍らではやはり小さく手を振りながら永野晴海が微笑みを浮かべている。

手を振り返す2人も自然と笑みがこぼれる。

「また一緒に仕事ができたらいいわね！」

「はい！」

「ぜひ！あ、でも私達、来年は受験だから無理かな？」

「あ、そうかあ、受験生だもんね。2人ならやっぱり大学受けるんだよね？」

「ええ、そのつもりです」

「けっこう難関なんで頑張らないと」

「あなたたちなら大丈夫。聞いたわよ。学年のトップ2なんですってね！」

「いやあ、あはは…」

照れ笑いする亜紀。

「ほら光一、なに黙ってるのよ！」

香織の肘が葉山をよろめかせる。

「あ、ああ…」

葉山は亜紀をじっと見詰める。

「…この次は負けないよ」

「はい！楽しみにしてます！」

片腕で勇ましく力こぶのポーズをとり、亜紀がウインクする。

「まさか根に持ってるわけ！？あきれた…」

「そ、そういうわけじゃないよ！」

香織の冷たい視線に葉山は慌てて弁解する。

「そういえば永田さんは？」

晴海がその姿を探すが見当たらない。

「もうお帰りになったわ。ずいぶん張り切ってたわよ。あなたたちの熱演が良い刺激になったみたい」

「そんな…でももしそうなら嬉しいです！」

目を輝かせる亜紀。

「意外でもなんでもないわ。このお兄さんも嫉妬するほどなんだし！」

「だからそれは…ま、大いに勉強になったよ。部長さん」

観念して苦笑する葉山。

「”後生おそるべし” っていうやつね」

「ああ、僕らもうかうかしてられないよ…君達はこの道に進まないのかい？」

この世界の第一人者にこうまで言われて気分の悪からうはずがない。だが亜紀は、恥ずかしそうに頭をかくと首を振った。

「大学では、学問に専念したいんです」

「そうか、残念だよ…」

「ま、その前に受からなきゃですね！」

照れ笑いする亜紀。その屈託無い顔を葉山はじっと見ている。そしてその葉山の横顔を何故か早瀬が奇妙な表情で見ている。

その時、谷村の声が2人を呼んだ。

「沢田！永野！名残は惜しいけど出発するわよ！」

『はいっ！』

揃って返事をする、2人はおじぎをして踵を返し、部員の誘導をはじめた。

「忘れ物はないわね？よく確認しなさいよ」

生徒達を見渡して頃合とみた谷村、いよいよ出発というその時…。

「あれ？誰か来たよ??」

「すごい勢いで走ってくる！」

少女達が口々にガラス越しの外を指差す。

「あ、あれって…」

「ありゃ、玉川さんだ」

スーツ姿で熱く全力疾走して来るのは誰だろう、お調子者の玉川であった。

「うおおおおーっ！ギリギリまにあったーっ！！」

玄関扉を開けるのももどかしく中に飛び込んでくる。その姿を見た山本が目を開く。

「タマ！？おまえ早いな！向こうを出てもう着いたのか！」

思わず腕時計を見て感嘆の声をあげる。玉川は社長の問いには答えず大きく深呼吸している。周りの少女達がそれを面白そうに眺めている。

「スー…ハー…スー…ハー……」

額に汗を浮かべながら玉川の表情は何でか安らか。

「タマっち！」

「や、やあ君たち」

すぐさままたかってきたのは1年3人組だ。

「そんなに息切らして、もしかして私達に会うため？」

相原麻美の問いに、仰け反りながら何度も頷く青年。

「タマ！」

山本社長がもう1度呼ぶ。

「ちょ、ちょっと待って！…も、もう少しこの空気を吸わせてっ！！」

玉川のうわずった声に少女達がどっと笑う。

「やだ、玉川さんヘンタイっぽい〜！」

山本もあきれれる。

「おまえ、帰って来るなりそれか…」

「だって、もう帰っちゃうんでしょみなさん？この様子からして…だったら！僅かな時間、五感全てで味わいたいっ！」

『(何をだ！？)』

その場の全員が心の中でつつこむ。

「あの、玉川さん、ご堪能のところ申し訳ないんですけど、電車の時間もありますので私達そろそろ出発しないと…」

谷村が困った笑みでそう言うと、玉川は慌てて謝る。

「す、すみません、挨拶もしませんで…あっ！そうだ！ちょ、ちょっとだけ待っていただけますか？」

玉川は受付に駆け寄る。

「ちょおつとごめんね〜！」

少女達の間をクネクネと変な動きでぬい進む姿は深海の不思議生物のようだ。

「(うわ、怪し…)」

進路上の子らが思わず身を退く。

「ミコちゃん！アレ！アレ取って！！」

カウンターに取り付くと中へ身を乗り出して壁際の棚を指差す。そこには一眼レフカメラが大きな三脚を着けた状態で横たえられていた。

「ああ、はいはい」

先刻と同じ女性がそれを取りに行く。あらかじめ頼んであったのか、迷いなく手に取る。

「んっ！重っ！」

「落とさないで！レンズぶつけないで！でも急いで！」

玉川が叫ぶ。

「んもう、勝手な事を…よいしょっと！」

窓口で愛機を受け取ると、玉川はにっこり振り向いた。

「記念写真撮りましょうよ！」

「はいはいみなさん寄って寄って〜」

ファインダーを覗きながら手をはたはたと振って促す玉川。本社ビルの入口前に白華と

山本ワークスの面々が並ぶ。総勢40人ほどか。

「そんな近くて入りきるのか〜？」

訊ねたのは貝田沙希だ。ビル前の駐車場は正面方向、対面の道路まで10メートルそこそこしかなく、背景に建物を入れようとすると被写体の幅からしてカメラがかなり近く見える。

「大丈夫だよ〜、これ広角レンズだから〜。やっぱり背景に本社入れた方がいいでしょ？どこで撮ったかすぐ判るし」

今度は野川裕子が心配そうな声を上げる。

「早くしないと暗くなっちゃうよお！」

「だ〜い丈夫、大丈夫。これフルサイズで実用感度すごく高いし、レンズも明るいから。このとおり強力なフラッシュもあるしね」

そう言ってゴツイカメラの上に聳え立つフラッシュを指でつついた。

最後に相原麻美も口を開く。この3人は最前列中央に陣取ってしゃがんでいる。

「そんなすごいカメラがあるならメイキング撮る時も使えばよかったのに」

「いやー、こいつ大きいし重いし、あちこち動いて撮るにはちょっとね、と言うかそもそも動画が撮れないんだよコレ…よっしゃ！これでよし！じゃあ撮るよ！」

『キレイに撮ってねーっ！』

3人が声を揃える。

「まあかしといて！女の子撮る時はいつも実力120%増しだから。あ、ところで僕は何処へ入れればいい??」

ファインダーから顔を上げた玉川に早瀬香織が手を振る。

「ここ、ここ、私の前に中腰で入って！」

そう言って自分の足元をつんつんと指差す。

「オッケー！」

頷くとカメラから離れて自分の位置につこうとする。

「あれ？もうシャッター押しました？」

端のほうで立っている谷村が問う。すると玉川は手に持った何かを振って見せた。

「リモコンですリモコン」

そして列に収まるとそれを構えた。

「はい！みなさん！いいですか〜？いきますよ〜、ハイ！ち〜ず！」

かすかなシャッター音と共に、閃光が暮色を一瞬、白く染めた。

夜のプラットホームを白い行列が行進する。それは家路を急ぐ白華女学院アクション研究会の少女達だった。山本ワークスを発ってから1時間弱、一向は予定通り十日市鉄道の榛原駅に着いていた。

先導するのは谷村教諭、しんがり部を部長の沢田と副部長の永野がつとめる。元気の良い足取りで向かう先には4両編成の始発列車が停まっている。

それにしても人気がない。少女達の賑わいがかえってそれを際立たせてしまうほどだ。蛍光灯の周りを旋回する蛾がわびしい。ホームは駅の一番端、番号はなんと0、ゼロ番線である。榛原は十日市鉄道の路線中央に位置する。一応は基幹駅で、両端以外の駅では唯一、他線への接続がある。それが榛^{しんりゅうせん}電線。全線単線で、電化されたのもつい10年ほど前という、十日市鉄道より更にローカルな路線である。全部で15の駅を1時間ほどで走り、乗り換える榛原と目的地の竜神はその両端にある。もっぱら通勤、通学の足であり、休日の遅い時間はほとんど無人である。もちろん運行もまばらで、乗り遅れるわけには決していかない。

「さ、てきばき乗り込んで！これを逃したら次は1時間後だからね！」

谷村の声が駅周囲の闇に吸い込まれてゆくのと同時に、彼女の背後、つまり生徒の先頭にいた1年3人娘が、さっと先行すると近くから社内を見回す。客の姿はほとんど無い。そして後続に向かって完全に無人の3両目を指差す。

「先生！早く早く！今なら貸切りですよ！」

谷村は頷くと後を振り返って少女達に先へとうながす。

白衣の少女達が小走りに中へ飛び込み、空席へ次々と勢い良く収まってゆく。

「急いで転ばないでね～、発車まではまだ5分くらいあるから～」

「キャーキャー騒ぐな！幼児かおまえらは！」

乗り込んできた沢田亜紀と永野晴海が部員達に注意する。彼女達で最後だ。

朝の通学風景でもここまで女子高生づくめではないだろう。もっとも白華女学園は全寮制なので、どのみち普通はありえない光景なのだが。そこは正に秘密の花園か。はっきり言って、他の客が今この車内へ足を踏み入れるのには相当な勇気が要る、そんな雰囲気である。とはいえ、他の客車もまだガラ空きなので、さほど迷惑にはならないだろう。実の所、彼女達が最後の乗客となった。

発車を告げるベルが鳴る。扉が閉まり、列車はゆっくりと動き出す。

ホームを離れ、やがてモーターの唸りが止ると、車輪の音がガタンゴトンと聞こえてくるようになる。古い車両なので揺れも大きめだが、それは規則正しい鉄道の響きと合わさると、眠気を誘うような、一種催眠的な心地良さを伴った。

生徒達は全員が着席し、谷村だけが車内の中央に立っている。列車が発ってから駅を2～3も過ぎると、周囲に灯火はほとんど見えなくなる。今は暗くて見えないが、そろそろ山影が近くに迫って来ているはずだ。1つ、1つ、停まる駅にも人影は見えず、稀に降りる客があるくらい。いつのまにか少女達もお喋りをやめ、ただ鉄輪の刻むリズムだけが聞

こえる。そして、とある駅を発車して暫くの事である。谷村は、年季の入ったつり革に掴まったまま目を閉じる、そして…

「沢田」

ただ一言。すぐそばに永野と並んで座っていた沢田亜紀。彼女は黙って頷き、左右に目配せをする。車両両端の席にいた少女が頷き、ずっと立ち上がると、隣の車両との扉の前に立つ。前後の車両には1人2人客がいたが、その動きに注意をはらう者はいない。

と、その時列車がトンネルに入った。轟音が満ちる。

「でははじめる」

その一言で車内の空気が、変わる。特に大きな声ではない。が、鋭敏に強化された少女達の聴覚は、音の洪水の中からそれを正確に聞き分けていた。そして、再び開かれたまぶたの下、現れたのは金色の虹彩に縦に細い瞳孔。沢田亜紀がその妖しい視線に見とれる。

それから最初に口を開いたのは永野晴海だった。

「まず本日の計画を確認します。我々は株式会社山本ワークス本社ビルに、見学という名目で入場、その内部を密かに精査し、当該法人が映像制作会社を装った敵対勢力であるか見極める、それが計画の目的です。これは暗黒貴公子デルタダガーの制作協力に関わる一連の作戦のうち最後のものです」

話す晴海は微動だにせず、声もごく小さい。だが車内にいる全員がその言葉を苦も無く聞き取っている。昼間からは想像もつかない、冷たい、機械のような口調。

「よろしい」

そう言って一瞬のぞいた舌先は二又に分かれていた。

「まずビルの設備についてですが、特に不審な点は見当たりませんでした。建物は高度な免震構造で、空調やセキュリティも最新です。が、あくまで民間レベルのハイグレードであり、軍事施設のような対爆、防弾仕様ではありません。各種配管、配線もごく一般的です」

谷村が頷く。

「そうね、私も熱源探査かけてみたけど、異常な高エネルギー反応みたいなのはなかったわ。まあ、パッシブセンスだけでは限界あるけどね。偽装の可能性は？」

「ありません」

晴海の即答に笑みを浮かべると、今度は亜紀に目を向ける。

「テイル1はどう？」

「私はテイル^{ツースリー}2 3、テイル^{ツーフାଇブ}2 5、テイル^{ダブルスリー}3 3と共に別行動でした。同日に雑誌社の取材があり、山本社長の急な発案で我々にも協力が求められ、司令の判断で応じたものです。これは観察範囲の拡大を企図しての事です。制作とは無関係な部署を回れた点で効果はありましたが、これといった収穫はありませんでした。テイル2に付け加える事はありません」

「テイル2、制作に関する設備からは何か得られたものはないの？」

「設備の水準は、驚くべきものです。撮影スタジオや編集室、それに工房。会社の規模からすると不相応な充実ぶりです。あの人形をみたでしょう？」

頷く谷村。

「ですが、それも現代兵器を作れるような性格の技術ではありません。ましてや、我々レムナントに対抗するオーバーテクノロジーなどとは、たとえば、例の人形にしても、確かに優れた設計ですが、あの構造では動力を組み込む事ができません。サイボーグなどに応用は効かないでしょう。だいいち、彼らにそんなことが可能ならハリウッドがとっくに世界を制しているはずですよ」

谷村の顔に笑みがこぼれる。

「そうね…他には？」

車内を見回す。

「デルタダガーのスーツを試着してみましたが、あれはただの衣装です。スーツはポリエステル、アーマー部分は発砲樹脂にアクリル塗装。撮影に使われていた物と同一です。アーマーの修理痕を確認しました。模造剣で叩いた程度で傷つくほどですから我々との戦闘に耐え得る物でないのは明らかです」

今度は相原麻美だ。あの元気潑刺を体現したような少女が、今は人形のように無表情で喋っている。

それから他の部員達が次々に報告を始めた。抑揚に乏しい声が次々と告げる内容は、どれも疑惑を否定していた。

「こんなところかしらねえ？」

沈黙が続く。

「どうやら山本ワークスはシロ、というのが結論のようね。撮影にもなんら怪しい点は無かったし」

「葉山光一の身体能力は大変に優れていますが、人間の範囲を超えるものではありません。彼の動きは時に実戦武術そのものですが、公開されているプロフィールにも豊富な武術経験が明記されており、問題はないでしょう」

沢田が言い添える。

「それが彼の売りだものねえ。いずれにしろ彼の体が機械化されているというのは考えにくい、というのが撮影中に直接抱きついた者の意見だったし、そうなると強化服とか、何らかの外的な強化手段が必要ね。でなければ、私のような強化人間に勝てるわけがない」

車内に沈黙が降りる。

「さて、テレビと現実、どちらが”本物”なのかしらね？」

笑みを浮かべた谷村の口元からシュッと息が漏れた。

多くのモニターが格子状に並んでいる。それぞれの画面には異なった動画が流れている。それは、どれも撮影された暗黒貴公子デルタダガーの戦闘シーンだった。戦闘員に扮したレオタード姿の少女達が画面の中を跳び回っている。

時折、ピッという音が鳴る。すると画面のどれかに” C a u t i o n ! ” という警告が黄色く表示され、映像が静止し、数秒のちに再び動き始める。そして、しばらくすると今度は別の画面でまたピッという音がする。

映像の光彩が眼鏡のレンズに明滅している。大きな操作卓の前に座っているのは如月真だった。

と、今までとは違う警告音が響く。同時に中央の大画面に編集室前の通路が映る。そこに葉山光一の歩いてくる姿が見えた。

やがてドアのブザーが鳴り、インターホンから葉山の声が聞こえてきた。

「俺だ、開けてくれ」

言い終わるより早く自動ドアがスライドする。コンソールからの遠隔操作だ。

中に入ってきた大男はいそいそと奥の制御卓に近づく。背後で扉の閉まるかすかな音。

「あれ？なんで全部の映像を調べてるんだ？」

「一応ね…」

座っている如月の肩越しに画面に見入る葉山。その目の前でも例の警告がパツ、パツと発生している。

「あの警告は？」

「…ぜんぶ動態パターンだね」

「それじゃまさか…」

葉山の表情がこわばる

「まあちょっと待ってよ。今、全体の8割くらいだから、終るまでにもう少しかかるんだ」

如月がキーボードを操作すると、中央の画面に今度は撮影中の1シーンが映った。沢田亜紀との例のNGだ。

「あ、とりあえず、このシーンは分析が終ってるよ」

「それで!？」

「彼女のフェンシングが全国レベルの実力だって判ったよ」

「それだけ？」

「動態分析で身体各部の加速度や予想される筋力を割り出したけど、超高校級の身体能力ではあっても、あくまで人間の範囲内だよ。さらに彼女はフェンシング部にも所属していて、白華といえれば知る人ぞ知る強豪だって」

「……………」

食い入るように画面を見つめる葉山。

「それにしても多いな、この警告」

「あれは動態パターン類似の警告でね、ま、要するに動きが似ている、という事は戦闘術

が同じかもしれないという事。デザイアの戦闘員は独自の格闘術を使うからね」

「なるほどな、あの気持ち悪い動きは空手とか柔術とか、普通の格闘技じゃありえないからな。…ん？でも…」

「察しがいいね」

振り向いて微笑む如月。

「もともとの動きが相当にヘンだって事。フィクションだからね。うち、戦闘員の殺陣に関しては社長と鎌倉さんが長年にわたって練り上げた動きをずーっと続けてるよね。あれはもう1つの架空武術と言ってもいい。例のデモから判るとおり、白華の子達はテレビ映像の見よう見まねで相当練習してるし、さらに今回鎌倉さんから直接指導を受けてるからね。それ以前に、彼女達オリジナルの殺陣だってあるだろうし」

「…偶然に一致する可能性も出てくるというわけか」

「そもそも”一致”と言ってもね、あれはレベルの低い警告で、まあせいぜい10数%くらいなんだよ」

「そんなに低いのか…」

「そこにさっき言った問題を考慮すると」

葉山はほっ息をついた。

「何の証拠にもならないと…」

如月がくすりと笑う。

「それにしても、いつもと逆じゃないか。誰かを疑うって大抵は僕だからね。君は女性に甘いし。デザイアは女性のための集団だってのに」

「そ、それは！…」

くちごもる相手に如月は意地悪く微笑む。

「でもねえ、これはやっぱり見間違いじゃないかなあ？」

「おまえ頭から否定的だったな。中高生の少女をスパイに使うなんて、連中ならやりそうだと思うないか？」

傍らのテーブルに手を伸ばし、如月が紅茶をすする。

「亜紀ちゃんがスパイだとすれば…偽者っていうのは考えにくいね。先生や友人たちとの接し方が、たとえば会話の内容が自然すぎる。接触を控えるようなところも全く無かったし。まあ君は白華アクション研の全員を疑っていたわけだから、それについては当然ということになるけど、さすがに馬鹿げてるよ」

「……………」

「あれだけの人数で周囲を騙し続けられると思う？彼女達が接触してきてからもう何ヶ月も経ってるわけだよ。そもそも出演依頼したのはこっちで、しかも普通ならまずありえない特殊なケース。作戦として説明つかないじゃないか」

葉山は言葉も無い。

「それにね、もっと決定的な問題点があるんだよ、僕らの場合は」

「え？」

青年は椅子を回して葉山に向き直る。

「それはね、デルタダガーが公然の存在だという事、架空のキャラクターとしてね…」

如月真の眉間にしわが刻まれる。葉山の表情にも苦渋の色がにじむ。

「完成間際のバトルスーツを社長に見つかるなんて、ましてや、勘違いした社長が、それを新番組の主役にするとはい出すなんて！」

自嘲の含み笑いがもれる。

「まったく、悪夢だったな…」

当時を振り返り、遠い目になる葉山。

「だが、もうそれは終わったんだ。忘れよう」

「終ってないんだよ…」

カップをテーブルに戻すと如月は溜息を着く。

「スーツの作り直しなんて出来る状況じゃなかったし、それならもう小細工せずにテレビのヒーローそのままで行こうって開き直った」

「そうだよ、それでうまくいったじゃないか。デザイアの企みを俺達はもう何度も阻止している。奴等の驚きようたたらなかったじゃないか。なにしろテレビのヒーローが現実世界に飛び出してきたんだからな！」

そう言って、葉山は如月の肩をぼんと叩いた。

「だからこそだよ…」

如月の表情は暗いままだ。

「声紋は変えてあるけど、体格はほぼ同じ、同一人物でなくとも何らかの関係を疑われてもおかしくない」

「それだって対策はしてるじゃないか！設備も大部分は移転したし、いつ奴等が襲ってきたって……………！！」

青年は優しく頷く。

「ようやく気付いたね。そう、彼女達がデザイアだなんて、そんな回りくどい方法をとる必要がどこにある？普通に攻めて来ればいいじゃないか。へたに応戦すれば正体が知れる、それだけで僕らの負けだ。社会生活の全てを失う事になるんだから」

丁度その時、分析の終了を告げるチャイムが鳴った。結果の詳細が中央画面に表示されている。

「” 動態パターンに若干の類似があるものの、身体能力、知覚能力は人類を逸脱してはおらず、強化改造を裏付ける要素とは認められない” だそうだ」

如月はすぐにシステムを終了させにかかる。まだ本社ビル内には人がいる、誰かに見られる危険は少しでも減らさなければならない。

「… 1つ訊きたいんだけど」

如月がたずねる。

「彼女たちがデザイアじゃないかって思ったきっかけは何？」

「……………」

「何か…カメラに写ってない物を見たのかい？」

「…いや」

葉山がのろのろと口を開く。

「写っては、いるよ…」

「どこに？」

電源を落とす手を止めると、如月は振り返った。

「例のNGシーンを見せてくれないか？」

「……………」

細い指がキーボードの上を踊ると、ほどなく件のシーンが全ての画面に流れ始めた。やがて沢田亜紀が葉山の切っ先を受け流す場面にさしかかる。

「そこっ！！」

葉山が叫ぶと画像は静止した。ちょうどデルタダガーが突きに入るところである。カメラは2人を横方向から捉えていた。

「彼女の顔にズームしてくれ…」

カメラがすーっと寄る。不気味に彩られた沢田亜紀の顔が画面一杯に広がる。こうしてまじまじと見ると正に悪鬼のごとき凄みがある。

「…この顔だ」

「彼女の顔？どこかおかしい？」

「表情だよ…」

「…名演技だね」

葉山が肩を落とす。

「そうなんだよな…写ってるけど、写ってない…」

そして隣の椅子に腰を下ろす。

「目…」

「目？」

「目なんだよ、眼光っていうのかな？あれは獲物を狙う狩人の目だった。映像じゃ判らないけどな。俺は今まで仕事の現場で、あんな目を見た事は無い。他で見たのは、戦場だけだ…」

「君がそう言うなら、ちょっと気になるね…」

画面に顔を寄せる如月真。

「(まあ、それだけじゃないんだがな…)」

撮影のあの日、落ちるウイナーを箸で受け止めた少女の動き。あれは果たして人間に可能だろうか？

「いや…」

葉山が頭を振る。

「俺の思い違いだ。お前の言うとおりに」

闇と轟音の中を列車は走る。

「さて諸君、今回は養成所始まって以来最大の実戦訓練だった。君達はまだ見習いだが、その能力を十分に発揮してくれた。この結果には首領もお喜びになるだろう。いずれレムナントの一員として一人前になってからも、この調子で頑張ってもらいたい」

そう言う谷村の口調は、これまでと違い、わざとらしくもったいつけたものだ。生徒達の何人かは笑いを懸命にこらえている。

「こらおまえら！解散するまでは作戦中だぞ」

ざわめきはぴたりと収まる。しかし少女達の顔には本来の表情が戻りつつあった。

「フ…ンフフフフ…」

含み笑いをもらす谷村。だが遂に堪えきれなくなり、大声で叫ぶ。

「もーやってられっか！バカバカしいっ！」

どっとわきあがる歓声。叫んだ本人が慌てて”お静かに！”と両手で制す。隣りの車両で舟を漕いでいた老人がハッと目を覚まし、何事かと見回している。

「…まったく…いくら姿を借りてるからって、テレビのヒーローがそのまま本物のわけないわよねえ…」

老人が再びうつらうつらし始めると白華一同は胸をなでおろす。

「本部の指令を受けたときは何の冗談かと思ったわよ」

「先生！冗談で済まされません！」

「そうですよ！こんな奇跡的なイベント、任務抜きで楽しみたかったのに～！」

ギャーギャー文句を言う生徒達。アクション研は秘密結社レムナントの人員確保・育成部隊の隠れ蓑である。だが部活としての実体もある以上、その活動内容は常に報告されている。そして、今回の出演依頼に際して本部から唐突に出されたのがこの指令なのであった。

「こらおまえら！教官に対して失礼だぞ！」

沢田部長が注意すると騒ぎは収まったが、少女達の顔はあきらかに不服そうだ。相原麻美などは頬をいっぱい膨らませて沢田を睨んでいる。まげずに睨み返す沢田。

谷村が苦笑する。

「まあまあ、無事に終わったんだし、戦果も上々だし、結果オーライじゃない？」

「だいたいその話、本当なんですか？”リアルデルタダガー”って…」

永野晴海が首を傾げると谷村が真顔になる。

「それは、本当なのよ。映像も見たわ」

彼女は本部で見たその光景を思い出していた。画面中で繰り広げられている戦闘、それは白華アクション研が演じたそれと似通っていたが、違いが2つあった。

1つはデルタダガーと戦っている相手。やはり全身に密着したスーツを身に着けた女達だが、スーツのデザインやメイクが違う。

そして何より、それが現実の出来事である点が異なる。黒い拳の一打ちでポンポン倒さ

れてゆく女性戦闘員は実際に死んでいるのだ…。

「…あれは容易ならない相手ね。デザイアの戦闘員をあかも容易く蹴散らせるんじゃ、私のような上級の強化戦士でも危ないわ」

「でもデザイアは私達にとっても敵なんだから、一緒に戦うってわけにはいかないのかなぁ？」

相原麻美の能天気な声に谷村は苦笑する。あきれた沢田が溜息をつく。

「バカかおまえは？」

「え～？なんで～??」

不服そうな声を上げる麻美にクスクスと上がる笑い声。谷村がその疑問に答える。

「それは戦う理由によるわね。同じなら手を結ぶ事もできるけど、そうでないなら”敵の敵は味方”なんて単純にはいかないわ」

「そうか～」

麻美は残念そうだ。

「ま、いずれ判る事でしょう。正直、それ以前に私や未だに半信半疑なんだけどね。ついでに言えば今回の指令、どこまで本気だったのかって言う…」

首を傾げる一同。

その時、列車はトンネルを抜けた。白華市に入ったのである。

「まあ、アレがデザイアを叩いてくれるなら、こちらとしては好都合。邪魔する理由も無いわ。むしろこちらが邪魔にならないよう気をつけるべきね」

谷村は最寄りの戸口に近づくと、その窓から空を見上げる。煌々たる満月。その冷たい光が山の端を青く照らしている。ふっ、ふっ、と、一定間隔でよぎる電柱の影。

「いい月夜だわ」

線路は山際を離れ、田畑の中に分け入る、その前方に遠く町の灯が見えて来た。竜神はもうすぐそこに迫っていた。

(完)

2011年2月6日 第1稿

http://mnl.sakura.ne.jp/yomimono/delta_d.pdf